

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5

始



9/1.32
H443



芭蕉句集新講

上卷

服部咲石著

四條書房刊



620-204

序

四百年の俳壇を展望すれば、蜿蜒たる一大山脉中に、高山峻嶺、名岳奇峰が各その特異相を誇つてゐる。しかし巍然群峰を壓して、王座を占むるものは即ち芭蕉である。

自分は、其主峰の裾野路、樹海、馬返、鹿戻、胸突八町より、絶頂に及び、洞窟、磐石、飛瀑、涌泉と及ぶ限りの地點を踏査して、この記録をつくつた。無論この偉大なる主峰には、自分が未踏の妙境が残されて居るであらう、しかしまだ、從來他者の全く探し得ざりし部分にも及んでゐるものゝ少くないことを斷言する。そして此記録が、自分より一日後れて此主峰を極めんとする人のために、多少なりとも道しるべともなれば、自分の最も欣幸とするところである。

昭和七年盛夏

服 部 畑 石

此書は勝峰晋風氏の引證該博なる新編芭蕉一代集に負ふもの最も多く、次いで贊川他石氏の芭蕉全集また樋口功氏の著書に負ふもの少くない、茲に特記して謝意を表す。

序

一

凡例

(一) 年代は自分の及ぶかぎり考證研究し、その定め難きものは他家の所見に従つた。

(二) 勝峰晋風氏の「新編芭蕉一代集」は、年代考證の數に於て、從來の同種著述中嶄然群を抜いてゐるので、成るべく年代配列法を執らんが爲に、多少の疑ひを存しつゝも同書に由つたものが多き。

(三) 重厚の「もとの水」湖中の「一葉集」のみに存して、それより以前に所見なきものを、晋風氏は疑はしとして本編より省いてゐる。しかし氏の「新編芭蕉一代集」には、全く氏の見識を以て若干の真蹟物を收めてゐる。さすれば「もとの水」「一葉集」もまた重厚、湖中の獨創の見識に由つたのかと思ふ。故にその兩書に就ては、他石氏の例に由つて、しばらく芭蕉の作と假定して、解釋を施して置く。

(四) 「もとの水」「一葉集」以外の諸書に、芭蕉の作として傳へられたものは、たゞ参考の爲に末尾

に附載して置く。

(五) 他の人の句にして芭蕉の作と誤傳されたるものは、これ亦末尾に附載して、其出所と作者名を明かにして置く。

(六) 活字本の弱點として校正の誤謬は必無を期し難い、若しそれらを發見されたらば御注意を給はらんことを希ふ。

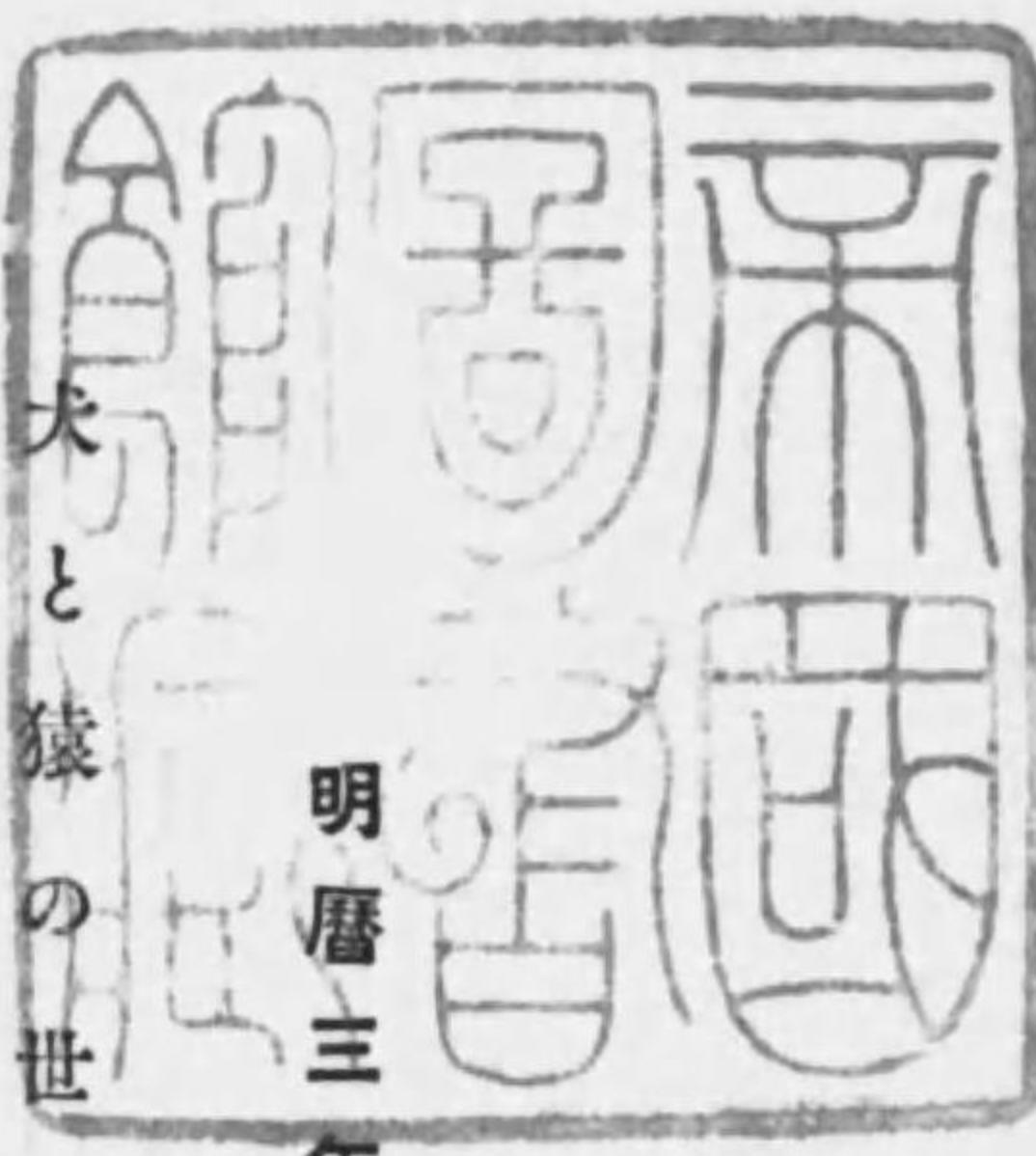
上卷目次

明暦三年、	十四歳、	一句	一
寛文三年、	二十歳、	一句	二
同四年、	二十一歳、	一句	三
同六年、	二十三歳、	一句	三
同七年、	二十四歳、	一七句	九
同八年、	二十五歳、	一句	八
同九年、	二十六歳、	一句	九
同十年、	二十七歳、	二句	一〇
同十一年、	二十八歳、	三句	一一
同十二年、	二十九歳、	二句	一四
寛文年中、	十八——二十九歳、	一句	一二五
延寶二年、	三十一歳、	一句	一六
同三年、	三十二歳、	八句	一七
同四年、	三十三歳、	一七句	三一
同五年、	三十四歳、	一七句	四〇
同六年、	三十五歳、	一四句	五一
同七年、	三十六歳、	八句	六一
同八年、	三十七歳、	一二句	六八
延寶年中、	三十八歳、	一句	七六
天和二年、	三十九歳、	九一	八九
同三年、	四十歳、	一句	一〇六
天和年中、	三十九——四十歳、	四句	一一六

天和四年、貞享元年、……四十一歳、……四八句、……一一九
貞享二年、……四十二歳、……三三句、……一六四
同三年、……四十三歳、……二二句、……一九四
同四年、……四十四歳、……七〇句、……二一九
同五年、元祿元年、……四五五歳、……一〇五句、……二七七
貞享年中、……四十一——四五五歳、……一二句、……三八二
元祿二年、……四十六歳、……一三六句、……三八九

芭蕉句集新講 上巻

服部 留石 著



明暦三年 丁酉 (十四歳)

大と猿の中 よかれ酉の年

(奥の細道芭翁抄)

贊川他石氏は「芭蕉全集」に

梨一は(芭翁抄)伊賀の猿雖の曾孫桐雨の筆記によりて、此句を明暦三年芭翁十四歳の歳旦とす。然るに勝峰晋風氏は西武の「鷹筑波」に「犬と猿の中立なれや酉の年」といふ一葉子の句をあけ、萩

一 明暦三年一

一

原蘿月氏は季吟の點ある立圖の詠草に「犬と猿の中もよかれや酉の年」の句ある事を示して、共に此句を疑問視せり、

と云ひ。勝峰晋風氏は「新編芭蕉一代集」に考證の部に收む。要するに此句は疑問の部に置くべきものであるが、處女作と傳へられるので、先づ假りに卷頭に置く。

句意は、犬と猿は仲の悪いものとされてゐる、そして十二支では申と戌の間に酉があるので、犬と猿の間に介在せしめて、世の中よかれ、と祝福希望したのである。

寛文三年癸卯（二十歳）

月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿

（小夜中山）

「佐夜中山」は寛文四年五月出版であるから、秋季の句は同三年の作と見る。

此隈なき月の光りぞしるべである、どうぞこなたへ入らせてたび給へといふのを、謡曲の句法を假

りて「入らせたびの宿」と掛け詞にしただけが作意である。

寛文四年甲辰（二十一歳）

姥櫻さくや老後の思ひ出

（佐夜中山）

前句と同じ理由により春季は四年の作と見る。

此句は、老後の思ひ出に姥櫻が咲くやナア、と詠歎したものとも見られ、又、姥櫻の咲くはや老後の思ひ出ナラン。と想像したものとも見られる、而して自分は後解を可とする。何れにしても「姥」と老後の取合せである。

寛文六年丙午（二十三歳）

七夕雨

七夕のあはぬ心や雨中天

(續山井)

「續山井」は寛文七年十月の出版であるから、秋冬の句はすべて六年の作と見る。

七月七日の夜は牽牛織女の兩星が一年にたゞ一度と限られた逢瀬である、然るに生憎くの雨で、兩星の逢ひ得ぬ心はや蓋し有頂天ナラン、といふべきを「雨中天」ともぢつたのである。

寐たる萩や容顔無禮花の顔

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

容顔美麗ではなく容顔無禮なる花の顔して寐たる萩や、と美麗を無禮にもぢつて、起きてあれば優しい萩の横に倒れたさまを擬人的に詠んだのである。

影は天の下てる姫か月のかほ

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

「下照姫」は大國主命の妹。「影」は陰影ではなく「光」の意である。月の面から發するあの光りは即ち天の下を照らす姫か、と下照姫の名を假用し、月を人格化したのである。

たんだすめ住ば都ぞけふの月

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

今日の月よたゞ澄め、住めば都ぞ、と「澄」と「住」を月と人にかけてゐるのである。

秋風の籠戸の口やとがりごゑ

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

秋の風が尖り聲で吹きあてるやり戸の口やナア、と「槍」に「尖り」、「口」に「聲」を連想して、擬人的にしたのである。

荻の聲こや秋風の口うつし

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

荻の聲のさや／＼と鳴るは、これや即ち秋風の口うつしナラン、と「聲」から「口移」と連想しての擬人的想像である。

月の鏡小春にみるや目正月

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

十月は時雨月であるのに幸ひのよい月で、その「月の鏡」から「見る」といひ、「小春」から「正月」といひ、又それをよい物を見た時にいふ言葉の「目の正月」にもつて行つたのである。

時雨をやもどかしがりて松の雪

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

時雨をやもどかしがりて即ち時雨では不満足だといふので、松が雪を戴けるナラン、と「松」に「待」をかけて初雪を云つたのである。

霜枯に咲くは辛氣の花野哉

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

秋は千草が花を競ふが、今この霜枯時に咲くのは草の花ではなくて、辛氣草の花野なるかな、と詠歎し

たのである。

霰 ま じ る 帷 巾 雪 は こ も ん か な

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

「帷巾雪」は薄片の雪をいふ。其薄い雪と霰が混つて降るのを、衣類の「帷巾」「霰小紋」と連想して小紋かな、と詠歎したのである。

子にをくれたる人の本にて

しほれふすや世はさかさまの雪の竹

(續山井)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

先だつべき親が残つて反て子が前に歿するを逆ま事といふ。世はさかしまに、天に向つて立つべき竹

寛文七年 丁未 (二十四歳)

盛 な る 梅 に す 手 引 風 も 茜

(續山井)

「續山井」は寛文七年十月の出版であるから春夏季のものは七年の作と見る。

「す手引」は赤手即ち空手でかへるの意。「も茜」は「もがな」が正しく、希望する意。今を盛りと咲いてゐる梅、それにはまた花をさいなむ風が吹きがちであるが、どうかそんな事がなく即ち空手で歸る風もがな、と風の強からぬことを希つたのである。

餅 雪 を し ら 糸 と な す 柳 茜

(續山井)

—寛文七年—

前句と同じ理由で七年の作と見る。

「餅雪」は牡丹雪など、同じくボタ／＼として大きく降るものいふ。青柳の糸といふ通り青かるべき柳條が、今は降りかゝる餅雪を用ひ飾つて白絲となす柳なるかなと、詠歎したので、その頃白糸餅といふものを賣つてゐたからの連想である。

あち 東風や 面々さばき 柳髪

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

「風梳_ニ新柳髪」から得た想で、幾株かの柳があちこちに各その髪をさばき、東風に梳らしめてゐるといふのを「あちこち」に「東風」を掛け詞にしたのである。

春風にふき出し笑ふ花も哉

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

「も哉」は希望の「もがな」である、即ち人が堪へんとしてこらへかね一度にふつと吹き出して笑ふ様に、春風にそゝのかされて一度にどつと咲き出す花もがな、と希つたのである。

花の本にて發句望れ侍て

花に明ぬなげきや我が歌袋

(續山井)

花にあかぬ歎やこちの歌ぶくろ

(如意寶珠)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

花の下で一句と望まれてもなか／＼出来ない、我が歌袋の紐がかたくて、此花の好風景を見ながら袋の口の開かぬ歎きやナア、と詠歎したのである。「こち」は「我」と「東風」と掛け調になるので、此作意からすれば、後句の方が更に一步進んでゐる。

初瀬にて人々花みけるに

うかれける人や初瀬の山櫻

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

大和の泊瀬は花の名所。又「千載集」の「うかりける人をはつせの山おろし、はげしかれとはいのらぬものを、源俊頼」の上部の「うかりける人」を、初瀬の山櫻に今日一日うかれける人やナア、と語呂合せ的に轉用して詠歎したのである。

糸櫻こやかへるさの足もつれ

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

花見もすでに歸るべき頃となつたが未だ名残惜しい、それは糸櫻これがや歸るさの足もつれになつて

纏綿するからであらう、と想像したので、「糸」と「もつれ」の取合せである。

風吹ば尾ぼそうなるや犬櫻

(續山井)

吹風に尾細くなるや犬さくら

(句解参考)

吹風は尾細くなるや犬さくら

(一葉集)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

犬櫻は櫻のうちで最も見るに足らぬ種類で、風が吹けば其犬櫻が尾細うなるや、と詠歎したのであるが、畢竟深い意があるのでなく、たゞ「犬」の縁から「尾細」と云つたまである。又「吹風は」は誤りであらう。

花の顔に晴うてしてや臘月

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

「晴うて」は方言で、晴々したさまにうたれて一寸氣おくれすること、「場うて」など、同意。「花の顔」は花を以て美人の容貌来形容するのだが、こゝでは更にそれを反対につかつて、實物の花を擬人的にしてゐるのである。

今を盛りの花の顔のこの美しさに氣おくれがしてや、かの空の臘月がおほろに霞めるナラン、と想像したのである。

なつちかし其口たばへ花の風

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

「たばふ」は「かばふ」「庇護」と同意。風をよろこぶ夏ももう間近くなつた、併し花には大禁物の風の神よ、この春を楽しむ人々の爲めに、今暫く其口を掩うて風を吹き出すな、といふのである。

花は賤のめにもみえけり鬼筋

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

鬼筋といふ恐しげな名をもつても、さすがに其花は賤が目にもうつくしく見えけりといふので、鬼も十七、番茶も出花、の如き氣分をふくんでゐるのである。

待郭公

岩躄躅染る泪やほとゝぎす

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

時鳥は八千八聲啼いて血を吐いて死ぬといふが、たゞに血を吐くばかりでなく、また岩つゝじを眞紅に染る血の涙やナア、と詠歎したのである。

—寛文七年—

一五

しばしまもまつやほとゝぎす千年

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作を見る。

時鳥の鳴音を、暫しの間も千年を過ぎが如くに待ち遠しく思ひつゝ待つやナア、と詠歎したので、暫しの間の「の」を省略したのは此時代の句風ではあるが困つたものである。

五月雨に御物遠や月の顔

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

御物遠は俗にいふ「お久しぶり」と同意。其縁から「顔」と擬人にしたので、五月雨が降り續いてお月様に御目にかかるのも久しづりやナア、と詠歎したのである。

降音や耳もすふ成梅の雨

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

聞きあきることを「耳が酸くなる」といふのは此時代に盛んに云つた詞で、毎日びしょ／＼と降る音がする、全くこの梅雨には耳も酸くなる、と云つたのである。

杜若にたりやにたり水の影

(續山井)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

水に映つてゐる杜若の影、それが本物の杜若の花と似たりや似たりや、と詠歎したので、感歎「や」が一つは省略されたのである。

夕顔に見とるゝや身もうかりひよん
(續山井)

夕顔の花に心やうかりひよん
(耳無草)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

夕顔の花をこゝでは顔の字の縁から美人に擬して、我身もうかりひよんと夕くれ方の顔に見とるゝやナア、と詠歎したのである。

寛文八年 戊申 (二十五歳)

浪の花と雪もや水のかへり花

(如意寶珠)

「如意寶珠」は安靜が寛文五年に編輯を企て同九年に就り、不幸病歿したので、似船が延寶二年に校訂版行した。左すれば假りに編輯最後の年に加入したものと見て寛文九年より下ではなく、また冬季の句は一年遡つて八年又は其以前の作を見得る。

雪はもと水である、其雪もや再び浪の花と咲かんとて元の水にかへるナラン、と想像して、「かへる」を「返り花」に掛けたのである。

寛文九年 己酉 (二十六歳)

かつら男すますなりけり雨の月

(如意寶珠)

前句と同じ理由で秋季の句は九年の作と見る。

「桂男」は月の神をいふ、今日は雨の月とて桂男が住まずなりけり、即ち月光が澄まずなりけり、と

兩様に掛けて云つたのである。

寛文十年 庚戌（二十七歳）

宇知山、山邊郡

うち山や外様しらずの花盛

（大和順禮）

「大和順禮」が寛文十年の出版であるので、此句は同年の作と見る。

宇治山永久寺は、後醍醐天皇が笠置落城後に潜行遊ばされた舊跡で、大和國山邊郡にある。地名の「内山」から外と連想して、この内山はや外様即ち外部の者の知らぬ花盛りナラン、と想像したので、此寺は醍醐派に屬する山伏寺であるから、眞言秘密の法の意をふくんで「外様知らず」と云つたものである。

見駒河、吉野郡

五月雨も瀬ぶみ尋ぬ見駒河

（大和順禮）

前句と同じ理由で十年の作と見る。

見駒河も亦大和名所の一で、五月雨の雨脚も瀬踏みしつゝ尋ねて流れ行きぬ、と雨を擬人法にしたのである。

寛文十一年 辛亥（二十八歳）

春立とわらはも知やかざり繩

（藪香物）

「藪香物」の出版が寛文十一年であるので、十一年の作と見る。

飾繩に春立つといふことを童も知るやナア、と詠歎したので「わらは」即ち童と「藁」と掛けたところ

ろが作意である。

きても見よ甚べが羽織花ごろも

(貝おほひ)

「貝おほひ」は寛文十二年正月の序があるので、所載の句は十一年の作と見る。

「貝おほひ」は三十番六十句の句合で、其評は松尾宗房(芭蕉)の手になる。此句は其第九番右で、左は「鎌できる音やちよい／＼花のえだ、露節」である。而して其評言は

左、花の枝をちよい／＼とほめたる作意は、誠に俳諧の親々ともいはまほしきに、右の甚兵衛が羽折はきてみて我おりやと云心なれど、一句の仕立もわろく染出すこと葉の色もよろしからず見ゆるは、愚意の手つゝとも申べし。其上、左の鎌のはがねも堅さうなれば。甚べがあたまもあぶなくてまけに定侍りき。

と自ら勝を左方に譲つてゐる。一句の作意もこの評言もいかに晩年の風と違ふかは注意すべきことで

ある。「甚兵衛が羽折」はこの評言によつて察するに當時の流行唄か何か根據があるだらうと思ふ。要するに作は「着てもみよ衣」と「來ても見よ花」の掛調である。

女夫鹿や毛に毛が揃ふて毛むづかし

(貝おほひ)

これは「貝おほひ」第二十番の右で、左は「鹿をしもうたばや小野が手鐵砲、正輝」である。其評言は、左の發句、小野と云ふより鹿とつけられ侍るは、かの紫のしなものひかるお源の物語にも、小野に鹿のけしきを書つらね侍りしより尤もよくとり合されたるなるべし、其上おのがてでつぼうと云を取なされたる鐵砲の、寸口かしこく打出されたる玉の句とも云べければ、火繩のひごんを打べきやうもなし。右の女夫鹿、委しく論ぜんも毛むづかしければ、あぶなき筒先あしばやに逃のき侍りぬ。

とこれまた勝を對者にゆづつてゐる。たゞ「毛むづかし」といふ詞の興味でがなあらう。

寛文十二年 壬子（二十九歳）

雲と隔つ友にや雁のいきわかれ
（芭翁全傳）

（芭翁繪詞傳）

此句は芭蕉が藤堂家の仕を辭して許されず、一夜脱出するにあたつて、同僚なる城孫太夫の門に短冊を貼付した（異説はあるが）と云はれ。それが寛文六年とも、また十二年とも云はれてゐる、茲には「芭翁全傳」に従つて十二年とする。

今我は此地を去る、さすれば君と我は、あだかも春の雁の生きながら朔北へ別れ去るが如く、雲烟千里を隔つる友にやアラン、と自己の心境を表はすに行雁を假り來つて形容したのである。

さやの中山にて

命なりわつかの笠の下涼み

（芭翁全傳）

「芭蕉句選拾遺」には延寶六年としてゐるが、「芭翁全傳」には貞享元年の條に「其十三年前初下りさやの中山にて」として此句がある、貞享元年から十三年遡ると寛文十二年になる、そこで此句は故郷を去つて江戸へ下る時の作と見なされる。

「命なり」は「山家集」の「年たちて又越ゆべしとおもひきやいのちなりけり小夜の中山、西行」から出てゐるが、炎暑にあへぐ夏の旅路に、たゞ僅かに一蓋の菅笠をかざして涼に入るゝ、それはまことのいのちなり、と此句では其場所から古歌を連想して、其一部を假用したまである。

寛文年中（十八一二十九歳）

花にいやよ世間口より風の口

（田中氏短冊）

—寛文年中—

二五

此句は晋風氏の「新編芭蕉一代集」に收めてあるもので、氏の鑑別によりて寛文年中の作と認めてゐる、今それにしたがふ。

花即ち妙齡の婦女にはとかく何のかのと世間の陰口がうるさい、然るに實物の花にはその世間口よりも風の口の方がいやだ、といふのである。

延寶二年 甲寅（三十一歳）

廿九日立春ナレハ

春やこし年や行けん小晦日

（千宜理記）

「千宜理記」は延寶三年の出版であるから冬季の句は二年の作と見る。

「こつごもり」は即ち二十九日で、其二十九日が立春であつた。そこで年内でも春になつたのだから「春はや來し」と疑ひ、また更にまだ舊年のうちであるので「年はや行けん」と疑つたので。「古今

集」の「年の内に春はきにけり」とせを去年とやいはん今年とやいはん、元方の影響をうけてゐる。

延寶三年 乙卯（三十二歳）

年は人にとらせていつも若夷
年や人にとられていつも若夷

（千宜理記）
（一葉集）

前句と同じ理由で春季の句は三年の作と見る。

元日に恵比壽の像を刷つた紙の札を賣りありく、それを買って門戸に貼つて福を祈る、其札をも、また賣る人を通じて若夷といふ。

あの若夷賣は、年は人にばかり取らせてそして自分はいつも若夷である、といふのである、

「一葉集」のは年はや人にとられて自分はいつでも若夷ナラン、と想像した格になる。「とられる」よ

りも「とらせる」方が悠揚な氣分がある。

目 の 星 や 花 を ね が ひ の 糸 櫻

(千宜理記)

前句と同じ理由で三年の作とする。

七夕の夜は、五色の糸を竿にかけて牽牛織女の兩星に願ひ事をする、これを乞巧糸又は願の糸といふ。然るに秋の七夕の兩星ではなく、人の二つの眼の星の願の糸は、五色の糸ならぬ糸櫻である、と「願の糸」と「糸櫻」と掛けてゐるのである。

町 医 師 や 屋 敷 が た よ り 駒 迎

(五十番發句合)

「五十番發句合」は延寶三年の稿本であるので三年の作と見る。

「駒引」は諸國の牧から所産の馬を都に貢とする、その貢を徵す爲めに諸國へ發遣される使を「駒迎」

といふ。

いくら駿馬でもそれが見出されて都に上らなければ所謂名馬の名を得ることが出来ない、それと同じく町醫師では折角の良醫も幅がきかない、故に、御屋敷方よりの招請が即ち駒迎なる町醫師やナア、と詠歎したのである。

針 立 や 肩 に 槌 う つ か ら こ ろ も

(五十番發句合)

前句と同じ理由で三年の作と見る。

「針立」は針醫者であるが、こゝでは按摩針と一口に云ふところの按摩の方の意に見るべきで、即ち今や砧うつころとて或は唐衣を打つもあらう、しかし按摩坊はや砧盤に衣を打たずして、唐ころも着し人の肩に拳の槌を打つナラン、と想像したのである。

命 こ そ 芋 種 よ 又 今 日 の 月

(千宜理記)

「千宜理記」の出版年次により三年の作と見る。

命こそ物種なるよ、また無事で今年もこの名月を見る、といふので、名月であるから「物種」を「芋種」と洒落れたのである。

人 每 の 口 に 有 也 し た 艳

(千宜理記)

前句と同じ理由で三年の作と見る。

下紅葉ならば山毎の入口にあるのだが、舌もみちは人々の口にあるなりといふのである。

文 な ら ぬ い ろ は も か き て 火 中 哉

(千宜理記)

前句と同じ理由で三年の作と見る。

文ならぬいろは、即ち紅、黃色とりくの木の葉も搔きよせて火に投げる、といふのに「書きて」を掛けたので、紅葉を焚いて酒をあたゝめるの意を句はしてゐるのである。

重 陽
盆 の 下 ゆ く 菊 や 朽 木 盆

(當世男)

「當世男」の出版が延寶四年であるから、秋季の句は三年の作と見る。

「朽木盆」は朽木の自然の形を利用して作った盆で、其木目が流れ即ち菊水のさまとも見られる、其盆に盆がのせてあるので、盆の下を流れ行く菊やナア、と詠詠したのである。

延寶四年丙辰(三十三歳)

天 秤 や 京 江 戸 か け て 千 代 の 春

(當世男)

前句と同じ理由で春季は四年の作と見る。

秤は一方上れば一方は必ず下る、然るに今や天下泰平にして京と江戸、即ち朝廷と幕府と何れ輕重なく、まこと千代八千代と壽くべき春である、といふのである。

—延寶四年—

三一

奉納

此梅に牛も初音と鳴つべし

(江戸兩吟)

延寶四年二月山口信章(後の素堂)と百韻二卷を賦した其一卷の發句である、「江戸兩吟」又「奉納」一百韻」といふ。

神苑の馥郁たるこの梅の花に、鶯が初めての嬌音をもらすであらう、のみならず、牛もまた初音の如くに鳴くであらう、と推測したので、天満宮の神苑には寢牛の像があるから、それからの着想である。

我も神のひざうやあふぐ梅の花

(續連珠)

「續連珠」が延寶四年出版であるから四年の作と見る。

これも亦天満宮での作であらう。梅の花を見て、我も此神の御みぐみによつて今こゝにかく神の遺愛のものをや仰ぎ得るナラン、と我と我身の上を想像したのである。

植る事子のごとくせよ兒櫻

(續連珠)

前句と同じ理由で四年の作と見る。

兒櫻を植うることは我が兒を愛するが如く注意せよ、といふのである。

たかうなや雪もよゝの簾の露

(續連珠)

前句と同じ理由で四年の作と見る。

「よゝ」は筍の節をも、また「多き」の意をも共にさう云ふので、此句ではそれが掛けてある。即ち雪も節々に澤山な篠の露ナリ、といふのである。

雲を根に富士は杉なりの茂かな

(續連珠)

前句と同じ理由で四年の作と見る。且つ後掲の句が四年故郷に歸る途中の吟とすれば、或は此句も同じ旅中での作ではなからうか。

「杉形」は杉の樹の梢の形で、米俵などを積み上げるのに下より上に順次に狭まるのをいふ、こゝでは其方に従つて、富士山が雲を根柢にして米俵などを積んだ形の茂りなるかな、と詠歎したのである。

延寶四辰のとし故郷に歸るとて

山。の。す。が。た。蚤。か。茶。臼。の。覆。か。な。
不。二。の。山。蚤。か。茶。臼。の。覆。か。な。

(蕉翁全傳)
(錢龍賦)

旅中囁目の富士の容を、或は小さく蚤なるかと疑ひ、或は茶臼の覆ひの如くなるかな、と詠歎したので當時の童謡に「蚤が茶臼をせたら負ふて富士のお山をちよいと越えた」とあるのによつたのである。

高畠氏市隱亭にて

富士の風や扇にのせて江戸土産

(蕉翁全傳)

これまた延寶四年六月郷里伊賀に歸つての作である。

都門に漂浪の身には俗世間でする様なみやげ物の用意はしなかつた、それで扇にのせて江戸みやけにするあの涼しい富士の風やナア、と詠歎したのである。蓋し扇を贈つたのであらう。

山岸半殘が會

百里來たりほどは雲井の下涼み。
百里來たるほどは雲井の下涼し。

(蕉翁全傳)
(芭蕉句選拾遺)

四年六月歸省中姉の夫山岸重左衛門の宅に於ける作である。「芭蕉句選拾遺」に元祿二年とするは誤。私は今江戸から山川百里のこの故郷に來たり、頃は雲井の下涼みする時節である。といふのである。

桑名氏興行、渡邊何某宅にて

詠るや江戸にはまれな山の月

(蕉翁全傳)

此句も四年歸省中の吟である。

江戸には稀な山の月を詠めることやナア、と屋根から出て、屋根に入る月に馴れた目に、故郷の山河の上に輝く清光を賞歎したのである。

今日の今宵寝る時もなき月見哉

(續連珠)

「續連珠」の出版年次により四年の作と見る。

今日のこの今夜は寝る時もなきほどによき月見るかな、と清光の隈なきと一坐皆會心の友たることを賞歎したのである。

見るに我もおれる計ぞ女郎花

(續連珠)

前句と同じ理由で四年の作と見る。

「我折る」は「感心する」「恐入る」といふやうな意味で、此時代に盛んにつかはれた。女郎花は見るに感心するばかりなるぞ、と「女郎花」を遊女に擬してゐるのである。

行雲や犬の逃ぼえむらしぐれ

(江戸新道)

行雲や犬の欠尿むらしぐれ

(六百番發句合)

此句を晋風氏の「新編芭蕉一代集」に延寶五年前としてあるが、已に延寶五年編の「六百番句合」にあるからは、冬季のものは其前年の延寶四年に置くのが相當と思ふ。

此句を、雲は動き、村時雨はさつと降り、犬は逃げながら吠える、といふ様に純客觀に見たがるが、さういふ解釋は後年の芭蕉の作品に就いていふべきもので、此時代に於てはそんな氣分で發句を作ることはない。先づ初作であらうと思はれる「欠尿」の方から云はう。雲がむく／＼と動いて其形が犬の様に見える、その犬の放りかける尿が即ちこの村時雨ダ、といふのであり。また再案と思はれる「逃吠」の方は、雲はだん／＼に押して行く、其犬の形の雲の逃げながら吠えるのが即ちこの村時雨ダ、とい

ふのである。

霜を着て風を敷寐の捨子哉
(六百番發句合)

霜をきて衣かたしく捨子哉
(坂東太郎)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に延寶六年前とあるが、已に延寶五年の「六百番發句合」にあるからは冬季の句は其前年の延寶四年に置くのが相當と思ふ。

初案と思はるゝ前句の方は、霜は地に置くもの、風は身に添ふものであるのに、これは反対に風を敷寐の床とし、霜を着てゐる捨子なるかな、と詠歎したものであり、再案と思ふ後句の方は、地に置くべき霜を着て。身に着べき衣の袖を敷寐の捨子なるかな、と詠歎したのである。

富士の雪廬生が夢をつがせけり

(六百番發句合)

此句を晋風氏の「新編芭蕉一代集」には延寶五年としてゐるが、「六百番發句合」の編輯年次から考へると、冬季の句であるから四年の部に置くが相当と思ふ。

「廬生が夢」は「邯鄲の夢」或は「黄粱一炊の夢」などゝ云はれる故事で、唐の世に少年廬生なるものが、邯鄲の道傍の一舍に憩ひ、假睡して、富貴榮達五子を生み、八十歳に達して死すると夢み、宿めて四邊を見るに、さきに憩ひし邸舎の主人が黍を蒸しつゝあつて、夢は其黍の未だ熟せざりし短時間のうちであつたことを知つたといふ。

黄粱一炊の短時間でなく、白晛々として「水無月の望に消ゆれば其夜降りけり」といふなる永久の富士が嶺の雪は、廬生が夢をして八十どころかもつと（長くつがせけり、といふのである。

白炭やかのうら嶋が老のはこ。
(六百番發句合)

白炭やかの浦嶋が老の霜。
(江戸廣小路)

前句と同じ理由で四年の作と見る。

—延寶四年—

前句は初案で、後句が再案であらう。白炭はやかの浦島が、龍宮から携へて歸つた手笞を開いたら忽ち白髪の老翁となつたといふ、その老の霜の如きものナラン、と白炭の色から想像したので、「白炭や焼かぬ昔の雪の枝、忠知」と句兄弟たるべきものである。

成にけり 成にけりまでとしのくれ

(六百番發句合)

此句も晋風氏の「新編芭蕉一代集」には五年の部に入れてゐるが、前句と同じ理由で四年とすべきものと思ふ。

「なりにけり」は最終に置かるゝ辭である、即ち今日は、いよ／＼其なりにけりといふべきまでに、年の暮がなつて終つたワイ、と詠歎したのである。

延寶五年丁巳(三十四歳)

門松やおもへば一夜三十年

(六百番發句合)

「六百番發句合」は延寶五年の編纂であるから五年の作と見る。

千門萬戸皆門に松竹を飾つてある。其靜寂なる風情を、昨日まで鬱鬱と慾徳の俗事に雜沓してゐた世の中に比較してみると、大晦日のたゞ一夜があだかも三十年も隔てたかの如くに思はれる、といふのである。

猫のつまへついの崩よりかよひけり

(六百番發句合)

猫の戀へついの崩より通ひけり

(江戸廣小路)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

「へいつ」は「竈」で。「伊勢物語」の業平が二條后のもとに忍ぶ條に

昔男ありけり、ひんがしの五條わたりにいと忍びて行きけり、みそかなる所なれば、かどよりも得入らいで、わらべのふみあけたるついひちの崩れより通ひけり。

とある末の「ついひぢ」を「へつい」に轉じて、其以下は其まゝに襲用したので、所謂換骨奪胎の手法である。

大比叡やしの字を引て一かすみ

(六百番發句合)
(泊船集)

前句と同じ理由で五年の作とみる。

比叡山と「し」の字の事は「一休咄」に、山法師が一休に読み易い大文字を長々と書くことを請ふたら、一休は七八尺の大筆に墨をどつぶりとふくませて、山法師が叡山の金堂の前から、坂もとの人家のあたりまで長々と接いた紙に對つて、一散に坂もとまで書き下ろして、読み易く長い文字は「し」だと云つたとある。「死」は誰人も認識しながら、また永久に解けぬ謎である、との一休の寓意であら

うが、こゝでは、たゞ比叡山に題いた霞の態から一休の「し」を連想したまでである。

大日枝の山を見やれば、往時一休和尚がせし如くに、今猶山巻かけて「し」の字を引いて一つらに霞んでゐる、といふのである。

上巳

龍宮もけふの鹽路や土用干

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

上巳即ち三月三日沙干の句で、今日のこの引きたる鹽路はや龍宮も亦土用干をせるナラン、と想像したのである。「土用」は春にもあるのでこゝでは夏の土用干を春の土用に轉用したのである。

先しるや宜竹が竹に花の雪

(六百番發句合)

「芭蕉句選拾遺」に延寶六年とあるが、前句と同じ理由で五年の作と見る。「足薪翁記」に「至來集」に「花にのぼる吉野の山や小歌ぶし、宜竹」宜竹は當時の一節切をよく吹て又笛を製するの良工なり、○「雍州府志」工産門「所々に之を造る、其内宣竹が作る所妙となす」○「正月揃」宗佐老人、實相坊教院安田、大森宗勳、是齋、宜竹、洞中節、一音などいへる名人出來せり、とあり、又「嬉遊笑覽」にも

横笛は一節切、宜竹は一代に三十管を作る、云々

とある。宜竹は製管、吹奏ともに尺八の名手であつたことが知られる。

名人宜竹が花下に尺八を吹いた、然るにまだ散るべくもない花がはら／＼と雪の如くに降りかゝる、世に美音は梁の塵をはらふといふ譬があるがそれはまことで、今我は宜竹が尺八の妙音に其事を先づ知るやナア、と詠歎したのである。

またぬのに菜賣は來たが時鳥

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

時鳥の鳴くのを待つてゐる、やがて曉方になつて、待たぬのに菜賣は呼んで來たが、時鳥は遂に聞き得なかつた、といふのである。

あすは粽難波の枯葉夢なれや

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

明日はもう端午で粽を祝ふ日である、思へば世の中こそ難波の芦(惡し)葭(善し)それらの枯葉でまことに夢なれやと詠歎したのである。

五月雨や龍燈揚る番太郎

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

燐火の高く上つて樹の梢あたりにあるものを神秘らしく「龍燈」といふ、しかしこゝのはそれではなく高く掲げる實際の燈火をさう見たてたのである。「番太郎」は番人の意で、後には辻番を専らさういふことになつたが、此時代にはまだ辻番屋制度はないから、こゝでは寺門前などの番人であらう。五月雨の降る夕暮方、寺の門番が小高いところに燈火を掲げる、それが朦々たる雨の中であるので、龍燈でもあるかの如くに見える、それを直ちに龍燈をあげる、と云つたのである。

近江蚊屋汗やさゝ波夜の床

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

近江は蚊帳の產地で、それから湖水を連想しての作である。夜の床に近江蚊帳が釣つてあり、それに風がそよ／＼と涼しげに吹きよせるので、肌の汗はやかの湖水のさゞ波とも云ふべきものナラン、と想像したのである。

梢よりあだに落けり蟬の殻

(六百番發句合)

「芭蕉句選拾遺」には延寶六年とあるが、前句と同じ理由で五年の作と見る。

蟬は樹から樹に飛び移つて樂を奏してゐるが、その脱殻の方は梢からたゞ空しく地に落ちてしまつた、といふのである。

秋來にけり耳をたづねて枕の風

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

秋即ち枕の風がそよ／＼と耳のほとりを尋ねて來にけり、と詠歎したのである。

今宵の月磨出せ人見出雲守

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

此時代の銅鏡は裏面に鶴龜、松竹梅、其他の圖や、製作者の名が、しかも嚴めしく何野何某守藤原の何々など鑄出してあつた。それで鏡製造人たる人見出雲守よ今宵の月の鏡も磨き出せ、と命令したので人名も「人が見る」「雲を出る」の二つを組合せていかにも實在らしく假作したのである。

枝 も ろ し 緋 唐 紙 や ぶ る 秋 の 風

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

萬葉の紅葉はさながら緋唐紙を張つたやうである、と其一枝がもろくも、さつと吹き来る秋風に緋唐紙が破られる、即ち紅葉がかつ散るといふのである。

唐 箱 や 軒 端 の 荻 の と り ち が へ

(六百番發句合)

前句と同じ理由で五年の作と見る。

軒端の荻といへば風情があるが、いくら似て居るとはいへ唐桑では雅趣がない、それで唐桑はや軒端の荻の取りちがひナラン、と想像したので又「源氏物語」夕顔の巻の「軒端の荻」からの想である。

實 や 月 間 口 千 金 の 通 り 町

(江戸通り町)

「江戸通り町」は延寶六年七月の出版であるから、月の句は五年の作と見る。

二葉子、紀子、ト尺の四人で歌仙が一巻ある。

こゝ間口毎に千金に値する通り町、即ち土一升金一升のこの通り町を、げにや月の皎々と輝き照らすことよ、とあるべき下部の省略である。

あら何ともな。や 昨日は過てふぐと汁
あら何ともなきのふは過て河豚汁

(江戸三吟)

(六百番發句合)

延寶五年京の伊藤信徳を迎へて、山口信章と三吟三百韻を興行した、其内の一巻の發句である。「俳林良材」に

一とせ「きのふも過ぬふぐと汁」といふ句をまうけ、五文字を置わひて、洛の信徳の東武に第をひかるゝを待て「あら何ともな」の七字を得られつる。

とある。

河豚は命取りがあるので、それを食して一晩心配したが、さて其昨日は無事に過ぎ、今朝になつてもあら何ともなや、とよろこんだので「あら何ともなや」は謡曲の調をとり用ひたのである。

一時雨碟や降て小石川

(江戸廣小路)

「江戸廣小路」は延寶六年の出版であるから、冬季の句は五年の作と見る。

「小石川」は舊水戸邸(現東京工廠内)を貫いてゐる小川で、一時雨つぶてがや降つてこの小石川となるナラン、と想像したのだが碟と小石の取合せに過ぎない。

延寶六年 戊午(三十五歳)

立春

庭訓の往来誰が文庫より今朝の春

(江戸廣小路)

「江戸廣小路」は延寶六年の出版であるから六年の作と見る。

「庭訓往来」は北畠玄惠法師の作(異説はある)で、日本化した漢文調の異様な當時の文體で四季の消息文範を認めたもの。室町時代から續いて江戸時代まで、寺子屋で兒童の教科書として必ず用ひたのである。

文庫もまた寺子の手習草紙、書籍、筆墨紙などを入れて置くもので、大略半紙を折らずに入れられる位の大きさ、高さ八九寸、中に掛子がある。

庭訓往来に「の」の字のあるのは「ティキンワウライ」を寺子屋などでは「ティキンノウライ」と云

つて居たから、それを其まゝ表す爲めに「の」を用ひたので、「テイキンノワウライ」と讀むべきものではない。

陰曆では多く立春と元日があまり日を隔てない、それで立春の意の今朝の春といふ語も新年といふ感しをもつ。

寺子供が新年早々師匠の前に並んで読み初めをする、その中で誰の文庫から先づ今朝の春が立つであらう、即ち誰がさきに文庫から庭訓往來を取り出すであらう、といふ意を詩的に表現したので、庭訓往來の首章は新春を賀する文であるからの連想である。

太裏雛人形天皇の御宇と。かや。
(江戸廣小路)

内裏雛人形天皇の御宇かとよ。
(芭蕉句選)

前句と同じ理由で六年の作と見る。謠曲「杜若」に

仁明天皇の御宇かとよ、いともかしこき勅をうけて、大内山の春がすみ、立つや彌生の初めつ方、

云々

といふ一齣がある、この「大内山」「彌生の初めつ方」から想を構へ、「仁明天皇」を「人形天皇」ともちつたのである。

内裏雛の優に氣高くおはす風情は降れる世の姿でなく、それは人形天皇の御宇とかや、と遙かに古き時代の佛の偲ばれる意を端的にそれと詠歎したのである。

あやめ生り軒の鰯のされかうべ
(江戸廣小路)
あやめ生けり軒の鰯のしやれ頭
(みつのかは)
あやめ生けり去年の鰯の觸體
(ばせを鹽)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

「生」は下二段活で「はゆ」、上二段活で「おふ」「いく」と三様に讀む、然るに助動詞「り」は下二段、上二段の動詞には添ひ得ない、即ち「り」は「は・す」「おはす」「いかす」と活用する辭のみに

つき得る、故に「生り」は何と讀むにしても語格上明かなる謬りである。殊に「おへり」と讀む如きは二重の謬りで「おふ」「おひ」とは活用するが「おへ」とは云はぬ、「おふ」「おへ」は「負」のよみ方から類推の誤りであらう。

在原業平が陸奥に旅寐して、或夜「秋風の吹くにつけてもあなめ／＼」と歌ふのを聞いて、何者かと其あたりを尋ねたら、地上に一の髑髏があつて、其眼窩を貫いて一莖の薄が生えて居り、其薄が風に揺れると歌のやうに聞えるのであつた。此髑髏は小野小町の果てゝあると聞いて、業平は「小野とはいはじ薄生ひたり」と下をつけて小町の靈を慰めた、といふ話は諸書にあり、また歌も多少違つてゐる。

軒下には節分の時挿した髑の頭がまだ其まゝ残つて居り、軒端には端午の菖蒲が葺いてある、何れは農家などの囁目であらう、其髑の乾からびた頭、菖蒲の形、「あやめ」といふ音調から、小町の「あなめ／＼」の歌、薄、髑髏と想を走せ音を擬して作りあげたゞけのものである。

水 む け て 跡 と ひ た ま へ 道 明 寺

(江戸廣小路)

不ト亡母追悼

前の句と同じ理由で六年の作と見る。

一柳軒不トは通稱岡村一郎右衛門、「江戸廣小路」を選んだ人で、其母を悼んだ句である。

「水むける」は死者の靈に水を手むけること。「道明寺」は河内國道明寺で乾飯を製して賣つた、それから糒をたゞ「道明寺」とばかりもいふ。

道明寺は寺の名であり、また糒の名として季をもつ、又糒は食する前水に浸して軟かにする、それで道明寺に水むけて母の亡きあとの靈をとひとむらひたまへ、といふので、或は不トの母が老いて歯も失せ固いものは食し得なかつたのであらう。

水 學 も 乘 物 か さ ん 天 の 川
水 草 も 乘 物 か さ ん 天 の 川

(江戸廣小路)

(芭蕉句選拾遺)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

「水學」は水泳、水馬などの技術にすぐれた人の意で、こゝでは其水馬の方をさし、「のり物」は即ち馬である。「水草」は草書の學の讀誤りであらう。

一年にたゞ一度の逢ふ瀬といふ牽牛織女、天の川を中に挟んで彦星はさぞもどかしく思ふであらう、それと知つては無骨一片の武藝者も、我が馬を彦星に貸さう、といふのである。

雨の日や世間の秋を堺町

(江戸廣小路)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

「堺町」は日本橋の堺町で、當時の劇場の所在地。江戸歌舞伎劇は延寶から隆盛に向ひつゝあつて、一面には河原者と蔑視するかと思へば、多くの婦女子は俳優の風を禮賛模倣し、士人もまた劇場に入するといふ矛盾な世態であつた。

雨がしつゝと降つてゐる、一般世間の秋はまことに淋しい、しかし一步この堺町に入つてみるとこ

ゝは全く別天地で、人々は歡樂に陶酔して秋の淋しさなどは思ひもつかぬ、げにこゝは世間の秋と堺するところの堺町である、といふのである。

木を伐て本口見るやけふの月

(江戸廣小路)
(芭蕉句選拾遺)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

今日の月はまん丸く、宛かも木を伐つて其伐口を見るが如くである、といふのを端的に「見るやナア」と詠歎したのである。

蒼海の浪酒臭しけふの月

(坂東太郎)

「坂東太郎」は延寶七年の出版であるから、秋冬の句は六年の作と見る。

名月が今しも海面を離れて上らんとする、其さまが宛も盃洗から朱の盃を上げんとする如くに見える。それで其盃洗たるところの大原の浪が酒くさい、との客觀に因由しての主觀である。

盃や山路の菊と是を干す

(坂東太郎)

前句と同じ理由で六年の作と見る。

謡曲「安宅」の「この山陰の一宿りに、さらりと圓居して、ところも山路の菊の酒を飲もうよ」とあるのに因つて、今我も山路の菊とは干す、といふのである。

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

(芝肴)

似春、四友と興行した三吟百韻が三巻あつて、其一巻の發句がこれである。「芭蕉翁發句集」には延寶天和の頃としてゐるが、「一葉集」に延寶六年秋と推定してゐる。

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

(芝肴)

見渡したり、詠めたり、見たり、さま／＼にしてみても即ちつく／＼と觀ても、眼前の風景なり、また古い歌や物語の連想からも、ともに趣の深いこゝ須磨の秋なり、といふのである。

色付や豆腐に落て薄紅葉

(兩吟百韻)

杉風との兩吟百韻の發句である。其年代に就ては晋風氏は「新編芭蕉一代集」の連句編に種々考證して延寶六年としてゐる、然るに同書俳句編には七年として居り、又他石氏は芭蕉全集の年譜に五年頃なるべしとしてゐる、今しばらく晋風氏の連句編によつて六年とする。

薄紅葉が豆腐に落ちて、其豆腐に色つくやナア、と紅と白との對象美を詠歎したのである。

今朝の雪根深を園の枝折哉

(坂東太郎)

「盃や」の句と同じ理由で六年の作と見る。

—延寶六年—

「枝折」は「葉」で山路を行く時、歸路又は後から來る人の目標の爲めに木の枝を折つて置くことをいふ。

雪は家の周圍の地を掩ひ、滿目白皚々として、何が何所にあつたのかさっぱりわからない。たゞ屋敷畑には葱がところ／＼雪を貫いて尖を見せてゐる、即ちそれが枝折なるかな、と詠歎したのである。

鹽にしてもいざことづけん都鳥

(武藏十歌仙)

延寶六年に京の春澄が江戸に下つた時、似春と三吟で三歌仙を興行した、其内の一巻の發句である。「伊勢物語」に業平が隅田川のほとりで京を思ひやつて「名にし負はゞいざ言問はん都鳥我おもふ人はありやなしや」とよんだ歌がある、その「言問はん」を「ことづけん」ともちつたのである。

春澄も業平と同じく遙々と京からこの武藏の國に下つて來た、それで業平と同じく郷愁に堪へないであらう、だから鹽漬にしてなりとも隅田川の都鳥を、京の思ふ人にことづけて送つてやらう、と春澄

への挨拶である。

わすれ草菜飯に摘ん年の暮

(江戸蛇の鮆)
(一葉集連句)

「江戸蛇の鮆」は延寶七年の出版であるから、冬の句は六年の作と見る。

「一葉集」にこれを發句に千春、信徳と三吟の歌仙が一巻ある。

「忘草」は本名を「萱草」といひ、それを食すれば憂を忘ると云ひ慣してゐる、それで菜飯の菜の代りにそれをつんで、飯に交ぜ食して世の煩雜な俗事を忘れよう、といふべきものを、下部を餘意として剩したのである。

延寶七年巳未(三十六歳)

於、春々大なる哉春と云々
(向の丘)

「向の丘」は延寶八年の出版であるが月がわからぬので、七年の作と見る。

古書の一齣でもあるらしい語勢を假作して、駄蕩たる新春の風景を贅美したのである。

杉風夢想

さゝげたり二月中旬初茄子
(一葉集)

「一葉集」に延寶七年の作としてあるに従ふ。しかし猶考證を要すべきものである。

採茶庵杉風は通稱を鯉屋市兵衛と云つて、幕府の魚の御用商人で、初めは談林調であつたが後に芭蕉門となつた、且つ芭蕉の後援者の一人でもあつた。

「夢想」は俗にいふ「夢の御告げ」である。此時代には夢の中に句を作り得ると「夢想開」と云つて

俳諧を興行する慣習があつた。この句は杉風が夢想の句を得たので、芭蕉が此句を以て祝し「天下のおかげ我等まで春、杉風」「雨霰古藏廣くおさまりて、仙風」等で表八句がある。

「二月中旬初茄子」は唐の王建の華清宮を詠じた「酒幔高樓一百家、宮前楊柳寺前花、内園分三得湯水、二月中旬已進瓜、」の結句から所謂「走り物」の想を得たのであるが、延寶八年の杉風の「常盤屋句合」の跋文に、芭蕉が再び

つら／＼神田須田町のけしきを思ふに、千里の外の青草は麒麟につけてこれをはこばせ、鳳の卵は糠にうづみ、雪の中の茗荷、二月の西瓜、朝鮮の葉人參綠もふかく、唐のからしの紅なるも今この江戸につどひ、云々

と記してゐるのは、王建の詩によほど心をひかれたものと見える。

杉風が夢に見た初茄子、それは一富士二鷹三茄子の内のしかも極めて珍らしい走り物であるから、それを君公に献上したり、といふので、茄子を夢みた杉風を祝福したのである。

雨降りければ

草履の尻折りて歸らん山ざくら

(江戸蛇の鮐)

「蛇の鮐」の出版が延寶七年であるから、春季の句は同年の作と見る。
「芭蕉句選年考」には此句に就て

「庭の巻」に(中略)上野花見に雨にあうて吟じたる昔の句也、

とある。又「四哲集」には「延寶七年上野行脚中の句なり」とあるが、延寶七年には郷里伊賀の上野にも歸らず、上野國へも旅行した形跡がないから、「庭の巻」にしたがつて、江戸上野の花見とすべきである。

花見に出かけたら生憎く雨がふつて來た、大分歩いたので草履の尻の方が長く伸び出した、そのまゝでは泥がはねるので、それを内側に折つて歸路につかう、といふのであるが、一面衣の尻を端折るにつれて、草履の尻も折ると共に急ぐ氣分を云つたのである。

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

(江戸蛇の鮐)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

和蘭は徳川時代に、通商を許されてゐた唯一の歐洲人で、其代表者が何年かに一度江戸に参向し、本石町三丁目の阿蘭陀宿長崎屋に泊つた、そして多くは春季であつた。賴政の歌に「花咲かば告げよと云ひし山里の使は來たり馬に鞍置け」といふのがあり。又それをとつて謡曲「鞍馬天狗」に

花咲かば告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、鞍馬の山の雲珠櫻、云々

とある、それから得た着想である。

この句は、阿蘭人も例の如く花の頃とて江戸に來た、そこで我も花見に行かう、僕よ馬に鞍を置け、とも見得るが、また、馬に鞍を置いてかの外つ國人もこの江戸の花に來たワイ、と江戸を謳歌したものとも見られる、自分は其後説を探る。

夏の月御油より出て赤坂や。
(向の丘)
(芭蕉翁發句集)

「於春々」の句と同じ理由で七年の作と見る。

御油も赤坂も共に東海道五十三次の宿驛で、其間僅に十六町、五十三次中の最も相距い距離にある宿である。夏の夜は短く、其月を仰ぐ間に、あだかも東海道の御油を出ると思ふと直ぐ赤坂である如く、ほんの短い間であるといふのである。

虫

蜘蛛何と音をなにと鳴秋の風

(向の丘)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

秋風が吹くころはくさ／＼の虫が一齊に彼等の戀の音樂をかなでる、その中に同じ虫でありながら黙りこくつて居るものは蜘蛛である。そこで蜘蛛は何と鳴くか、音をいかに鳴くぞ、とだまり屋たる蜘蛛にたづねかけたのである。

愚案するに冥途もかくや秋の暮

(向の丘)

思案するに冥途もかくや秋の暮

(芭蕉句解参考)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

「愚案するに」は、古書などに自己の意見を注記する場合に用ひる此時代の慣用語である、「思案するに」では全く時代の匂ひがぬけて了ふ、誤なることが明らかである。

秋の暮はいかにも寂寥の感に打たれる、愚ひそこにこれを案するに、人死して後に行くといふかのよみの途もまたかくの如くにやあるらん、と想像の意をのべたのである。

小野炭や手習ふ人の灰せゝり

(向の丘)

前句と同じ理由で七年の作と見る。

小野道風は日本三筆の一人と云はるゝ書の名手である、その小野を炭の産地小野に思ひよせて、手習をする人が灰にいたづら書をする、と云つたのである。

延寶八年 庚申（三十七歳）

郭公まねくか麥のむら尾花

(後れ双六)

「後れ双六」は延寶九年の出版で、其九月に天和と改元された、それで出版は九月以前たることがわかる、さすれば夏季の句は其前年たる延寶八年の作と見るべきものであらう。

尾花の風になびくのは人を招ぐ手の形に似てゐる、それを轉用して、麥の村尾花即ち穂の出揃つた麥は、時鳥を招くのか、と軽く心に疑つたのである。

愚にくらく棘をつかむ螢哉

(東日記)

「東日記」は延寶九年の出版で、延寶九年九月に天和と改元された、それで夏秋冬の句は八年の作と見る。

鹿を追ふ獵師は山を見すの譬の如く、螢狩の人がたゞ螢を獲んとするに専らなる愚かさの爲めに、あときを見定めもせずに棘をつかむ螢なるかな、と欲望に眼のくらむさまを詠歎したのである。

五月雨に鶴の足みじかくなれり

(東日記)

前句と同じ理由で八年の作と見る。

一延寶八年一

鶴の脛は長い、それが五月雨に水嵩が増して水中に没してゐる部分が多く、從て鶴の脛が短くなつたやうに見える、それを直ちに「短くなれり」と主觀で断じたのである。

聞夜きつね下はふ玉眞桑

(東日記)

前句と同じ理由で八年の作と見る。

「玉眞桑」は眞桑瓜の美稱である。又稻荷の社前に狐が玉を頭に頂いてゐる石彫などのあるのを見ることがある。それで好物な玉眞桑即ち寶珠の玉を得る爲めに、闇の夜をこれ幸ひとと狐が忍びよる、といふのである。

花むくげはだか童のかざし哉

(東日記)

前句と同じ理由で八年の作と見る。「東西夜話」に

裸子の木槿の花もちたる畫の讃にして、従吾亭に掛物かゝり侍りしよし、

とある。「かざす」といふ動詞は髪に挿すが語源であるが、また頭上を掩ふ、或は手を額にかざす、などの意をも派生し、名詞格では共に「かざし」である、すればこの「かざし」は髪に挿す方でなくたゞ顔面近くかざしてゐる方である。

芭蕉の作品が延寶八年以前にあつては、貞徳風の詞のかけ合せか、或は談林風の誇張的な詞によつたものゝみであつた、然るにこの句は、木槿の花を裸童がかざしにしてゐる、といふ寫生を主としてゐることは、よしや畫贊であらうとも、此次の「枯枝」の句と共に注意に値する。

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

(東日記)

枯枝に鳥のとまりけり秋のくれ

(曠野)

前句と同じ理由で八年の作と見る。

延寶九年の「東日記」には「たるや」とあつて、元祿二年の「曠野」に「けり」とあるから、後にさ

う改めたのである。而して「けり」の方に素堂の「鉢かたげ行霧の遠里」といふ脇だけ存してゐる。構想は夕陽西に春かんとして、枯木に一羽の鴉がとまつてゐるといふ、いかにも墨畫の材料らしいもので、芭蕉の此年以前の作風とは、全く違つたところの客觀を主とした描寫である。故に此句は、所謂正風の第一歩であるとして古くから注目されてゐる。しかし、たゞに此句のみではなく、前の花木槿もまた同じ傾向を示してゐる。

要するに延寶八年、三十七歳の芭蕉の心境には、從來の貞門談林以外の、眞の詩が芽生え始めたのである。

よるべをいつ一葉に虫の旅ねして

(東日記)

前句と同じ理由で八年の作と見る。

桐の一葉の水に浮んだのに虫の居るのを見て、よるべなぎさの捨小舟、などいふ事を思ひ寄せ、一葉舟に乗つて、虫の旅寐のよるべを定めず、さすらふのはいつまでぞ、と虫を人格化して問ひかけたのである。

である。

後名月

夜ル 窃ニ虫は月下の栗を穿ツ

(東日記)

前句と同じ理由で八年の作と見る。

十三夜は或は栗名月ともいひ、人々は栗をむきつゝ皎々たる月を仰き愛でゝゐる、其時虫は月などにはかゝはりもなく、たゞ彼の本能のまゝに窃かに栗に穴を穿ちそれを貪り食つてゐる、といふのである。

いづく霽傘を手にさげて歸る僧

(東日記)

前句と同じ理由で八年の作と見る。「芭蕉句選拾遺」に元祿二年とするは誤りである。

「霽」は雨がやむといふ意の文字であるが、俳書には屢時雨の意に用ひられてゐる、こゝも即ちそれ

—延寶八年—

である。

傘を手にさげて歸り行く僧を見て、こゝにはそんだけしきもなかつたが、何所か時雨のせしナランと想像したのである。

富家喰_ニ肌肉_一、丈夫喫_ニ菜根_一、予ハ乏し
雪の朝獨リ干鮭を嗜得タリ

(東日記)

前句と同じ理由で八年の作と見る。然るに「芭蕉翁眞蹟拾遺」に落水宛の書柬があつて、それにはこの句と「海暮て鴨の聲ほのかに白し」とを併せ記してある、「海暮て」の句は貞享元年の「甲子吟行」中の句で、此句は天和と改元前の延寶九年版の「東日記」にある、すれば其書柬は貞享元年に四五年前の延寶八年所作の句と其年の句とを併記したことになる、頗る怪しむべきものと云はざるを得ない。

富める者は肉を食し、丈夫は菜根を嚼むといふが、我が生活は貧しくて、雪のこの朝單に乾鮭を食

し得たり、と富家にあらず丈夫にもあらざる、佗たる俳人の生活を云つたのである。

石枯て水しばめるや冬もなし

(東日記)

前句と同じ理由で八年の作と見る。

木の枯れ花の凋める如く、石は涸れて骨立し、水は涸んで流れもない、といふのを「や」と詠歎して一段落切れ、さてかくては反つて冬の氣分もない、と前段に對しての所感をのべたのである。

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉

(續深川)

「續深川」に

こゝのとせの春秋市中に住佗て、居を深川のほとりに移す、長安は古來名利の地、空手にして金なきものは行路難しと云けむ人のかしこく覺へ侍るは、この身の乏しき故にや、

—延寶八年—

七五

の文章の後に此句がある、因て深川に移居の冬の作なることは明かである、さすれば深川に移つたのは何年か、諸説はあるが、自分は延寶八年説を探る、其理由に就ては次年の「芭蕉植て」及「芭蕉野分して」の二句の條下に悉しくのべる。

茶は常綠木で其古葉をふるふのは夏である。草庵のはとりに幾株かの茶があつて、夏の頃落ちて株の間にはさまつて居た枯葉が冬まであつたのだらう。

柴の扉に茶の古葉の吹きつけたのを、搔き掃く嵐なるかな、と詠歎したのである。

延寶九年、天和元年 辛酉（三十八歳）

九月廿九日改元

餅を夢に折結ぶしだの草枕

（東日記）

「東日記」は延寶九年の出版であるので九年の作と見る。

元日は世間一般に鏡餅を供へるが、我庵では仰々しくそんな事もしない、たゞ夢の中に於て鏡餅を供へて、其下に折り結ぶ歯染の葉を草枕に假寐するのみである、といふのである。

李下芭蕉を送る

ばせを植てまづにくむ荻の二ば哉

（續深川）

此句を晋風氏の「新編芭蕉一代集」には天和三年以前とし、他石氏は「芭蕉全集」の年譜で天和元年（延寶九）としてゐる。

芭蕉が深川六間堀の杉風所有の庵に入つたのが冬であることは諸説一致してゐるが、其年に就ては梨一の延寶六年説、支考の七年説、許六の八年説、素蓮の天和元年説と相違があり、晋風氏は其天和元年説を取り、他石氏は延寶八年説に従つてゐる。随つて此句に就て他石氏は八年に深川の庵に移つた其翌九年天和元年の作と見て居り、晋風氏はたゞ天和三年前としてゐる。要するに兩氏の説は天和元年（延寶九）年か、二年か、三年かといふまで接近し得る、然るに二年十二月に深川の庵は火災で失せ

て芭蕉は甲州に旅廻し、三年の春以後に江戸に歸つた、從つて三年春に此句はあるはずがない、残るのは元年か、二年かの二つである。ところが二年二月出版の「武藏曲」に「芭蕉野分して鹽に雨をきく夜哉」の句がある、二年二月出版の集に載る秋季の句は元年の作である、元年に「野分」の句がありとすれば、二年の「芭蕉植て」と調和しない、以上の理由で自分は、芭蕉の深川ト居は延寶八年で、翌九年春に芭蕉を植ゑ、秋に芭蕉の野分を聞き、其頃天和と改元されたものと見る。

李下は「曠野」に「餅つきや内にも居らず酒くらひ」の一句あるが、あまり知られぬ作家である。李下から贈られた芭蕉を庭に植ゑて、やがて緑の帳の涼しげな葉を期待してゐるのに、其芭蕉がまだ伸びぬのに、水邊近い湿地のことゝて、其あたりにほつと荻が若芽を見せた、それがいかにも芭蕉の芽を小形に模倣したやうに見えるのが小憎らしい、といふのである。

藻にすだく白魚や。とらば消えぬべき
(東日記)

藻にすだく白魚も。とらば消えぬべき
(句選拾遺)

前々句と同じ理由で九年の作と見る。

「すだく」は群れ集ふの意である。藻に添うて群れ集ひつゝあるあの白魚はや、手にとらば忽ち溶けて消え失せぬべきナラン、と白魚の可憐纖細な形に就て想像したのである。「白魚も」ならば終りが「消えぬべし」と結ばるべきもので「べき」とはなり得ない、「も」の誤りなることは明かである。

摘けんや茶を風の秋ともしらで
(東日記)

前句と同じ理由で九年の作と見る。

「木枯」は現今季題書では一般に冬とのみしてゐるが、「滑稽雜談」に
(前略) 八雲御抄に云、木がらしは秋冬の風、木枯也、但こがらしの秋の初風とも讀り、野宮歌合に正通の冬の物と難じて閉口し畢ぬ、○御傘に云、木枯は冬也、秋の句にもあるは秋よりも吹ゆへ也。

とあり、また「和訓葉」に

—延寶九年—

こがらし、木嵐の義なるべし、木枯にはあらじ、嵐をからしとよむは音便也、五十嵐をいがらしとよむも同じ（中略）歌に冬によめり又秋にもよめる事は野宮歌合の順の判に六帖の歌を引て證せり。とある。隨て歌には木枯を秋の意によんだものが少くない、此句の木枯を秋としてゐるのも以上の理由からである。

木枯が吹けば、今まで紅を競つてゐた木の葉も散り果てゝ寂寞たる姿になり、茶も摘まれたあとはあの嫩い綠りの色が無ざんや見るかげがなくなる、それをかの茶摘女は自分たちの仕事が、木枯の秋の如く惨い事とも知らずにかくも茶を摘みけんや、と茶接女の關心の有無を疑つたのである。

山吹の露菜の花のかこち顔なるや

（東日記）

前句と同じ理由で九年の作と見る。

山吹も菜の花も共に黃金色で、それに露の置いた風情は捨て難いものである。然るに山吹は詩にも歌にもよまるゝ事の多いのに引きかへて、菜の花の方はそれら詩人歌人の鑑賞してくれる人が稀である。

る。それを菜の花がかこち貌なり、と擬人的に観じ、また「や」と詠歎したのである。

盛じや花に坐浮法師ぬめり妻

（東日記）

前句と同じ理由で九年の作と見る。

「盛しや」は「盛りぢや」で「し」に書くのは此時代の慣習である。「坐」は「そぞろ」と讀む、何とはなしにの意。「うき法師」も此時代の慣用語に小兒を小法師ともいふ如くで、今の浮かれ坊と同じ。「ぬめり」も同じく此時代の慣用語で、後世の「あだ」といふものとやゝ似てるる、即ち當世めかすとでも云はうか、「ぬめり妻」は必ずしも有夫の女といふのではなく、軽く當世めかす女たちと見てよからう。

浮かれたちたる男、當世めかした女たち、即ち猫も杓子もすべてが今を盛りの花の下に、世の中の事は一切忘れ果てたがの如く浮かれてゐるのは盛りなことぢや、と、花も盛り、それを見る人も盛りなのを云つたのである。

上野春興

花に酔り羽織着てか。た。な。指す女

(續深川)

花に酔り羽織着て語れ。指す女

(一葉集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に九年説とあるに従ふ。

「一葉集」考證の部に「かたれ」とあるのは「な」と「れ」の變體假名の誤りである。

現代では總ての女が羽織を着て怪しまねが、幕府時代にはそんな女は夢にも見られなかつた。それが羽織を着てしかも刀をさして男に假装してゐる女、いづれはただの女ではなからうが、それにしても確かに花の酒に酔つたためであらねばならぬ。

艶ナル奴今やう花にらうさいス

(書翰)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に木因宛の書翰、天和元年説、として此句を探録してある、しかし書翰集天和年中の部には木因宛の書翰が載つてゐない、とにかく晋風氏の説に従つて延寶九(天和元)年として置く。

「らうさい」は「弄齋節」で此時代に流行した歌謡の名である。「艶なる奴」は此時代に流行の男色兼の小草履取であらう、「嬉遊笑覽」に

「昔々物語」に昔は小草履取といふもの十五六歳の隨分と美しき白子草履取にして(中略)客へ馳走にも出し供にも連る、但し供には道のあしきにはつれず、雨天につれず、天氣晴過たる暑氣に不連、跡より中間に笠もたせて連る、足袋をはかせかたの如く和らかに拵へて連る、さたの限り不自由なるものなり。

とある。其艶なる奴が今様風に粧ひ、花のもとに弄齋節を唄ふ、といふのでこの時代の世相を想はしめる。

上 己
—延寶九年—

袖 よ ご す らん 田 螺 の 蟹 の 隙 を な み

(書 翰)

此句もまた木因宛書翰によるもので、前句と同じ理由でこゝに置く。
田螺をとる蟹の少しの暇もなき故に袖を汚すらん、といふので、前書の「上巳」とは潮干の縁がある
だらうとは思ふが、より以上解説出来ねのを遺憾とする。

武藏野 の 月 の 若 は へ や 松 嶋 種

(松嶋眺望集)

「松嶋眺望集」は天和二年出版であるから、秋季の句は前年即ち延寶九年の作と見る。

「若」は原本が「芽」の彌誤りではなからうか、「若生」にしても意は通じるが。

武藏野の初月即ち月の若ばえはや、かの月の名所の松嶋の種ナラン、と想像したのである。

佗 テ す め 月 佗 齋 が な ら 茶 歌

(武藏曲)

「武藏曲」は天和二年の出版であるから、秋冬の季のものは其前年延寶九年の作と見る。
「蕉翁消息集」に九月十九日附去來宛の書翰

月をわび、身を佗、つたなきをわびて、わぶとこたへんとすれど問ふ人なし、猶わび／＼て「わ
びてすめ月佗齋がなら茶歌」と申候以上

といふのがある。

「月佗齋」か「佗齋」かいづれかそんな人があつたか何うか知り難い。自分は「佗齋」は佗びたる齋
即ち草廬など、同じやうな意に見る、無論人名のあることが明かにされば直ちにそれに服する。
或夜草庵にたゞひとり月光を仰ぎつゝ、月をわび、我が身の上をわび、才能の拙きをわび、わぶと答
へやうとすれどもあたりにそれを問ふ人もない、それで猶一層わび／＼て、空を仰いで、月もわがこ
の草庵の奈良茶歌にわびて澄め、と月光に對して云ひかけたのである。

茅舎の感

芭蕉野分して鹽に雨を聞夜哉
芭蕉野分鹽に雨をきく夜かな
(武藏曲)
(三冊子)

前句と同じ理由で延寶九年の作と見る。

其角の「枯尾花」に

天和三年（これは二年の誤なること明かなり）の冬深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり苦をかつぎて煙のうちに生きのびけん、是ぞ玉の緒のはかなき初也、爰に猶如火宅の變を悟り 無所住の心を發して、其次の年夏の半は甲斐が根にくらして、富士の雪のみつれなけれど、それより三更月下入無我といひけん昔の跡に立歸りおはしければ、人々うれしくて燒原の舊草に庵をむすび、しばしも心とどまる詠にもとて一株の芭蕉を植たり、雨中の吟、「芭蕉野分して鹽に雨を聞夜哉」と佗られしに、堪閑の友しげく通ひて、をのづから芭蕉庵とよぶことはなりぬ。

とあり、又竹人の「蕉翁全傳」もそれに従つてゐる。

此句の頃から芭蕉庵と呼ばれたとするはよいが。天和二年冬の火災後即ち三年とするの誤であることは、二年出版の「武藏曲」にすでに載つてゐるので明かである。「三冊子」に

この野分、はじめは「野分して」と二字餘り也、

と記じてゐる。

窗外は芭蕉の潤葉に野分の風音がすさまじく、屋内は漏りを受けんと置ける盥にはた／＼と滴る雨の音をきく夜なるかな、と詠歎したのである。海に近き深川の野分の強さ、草庵の屋根のあはれなる、いかにその一夜を明かしたことかと偲ばれる。

深川冬夜ノ感

船の聲波ヲ打て膚氷ル夜や。なみだ

(武藏曲)

船聲波を打て膚氷る夜は涙

(芭翁發句集)

船の聲にはらはた氷る夜や。なみだ

(續深川)

前句と同じ理由で元年（延寶九）の作と見る。

「芭蕉句選年考」に本間氏舊藏の眞蹟には第一が、また杉風の子孫の家に眞蹟の第三が藏してある、と記してある。

「ゆめみとせ」には此句の前に左の文章がある。

深川三またの邊りに草庵を佗て、遠くは士峰の雪をのぞみ、ちかくは萬里の船をうかぶ、あさぼらけ漕行船のあとしら浪に、蘆の枯葉の夢とふく風もや、暮過るほど、月に坐しては空き樽をかこち枕によりては薄き衾を愁ふ。

船の音、それがたゞ船の音とは聞えず、宛かも船の聲が浪を打つかに聞きなされるので、直に「船の聲浪を打つ」と云つたので、後年の「鴨の聲白し」と同じく。詩情の高潮に因る聽覺の感受である。「腸水る」は所謂斷腸の思ひなど、同意。

船の軋む音が波を打つて、聞く者をして腸の凍る思ひあらしむる夜やナア、と先づ屋外の寒夜の妻しさを詠歎し、さらに屋内には空樽をかこち薄き衾を愁ひて暗涙を催す我あり、と云ふ餘意をただ「涙」の一宇に省略し去つたる、極めて大膽なる叙法である。

けし炭に薪わる音かをのゝおく

(續深川)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に天和元年説とするに従ふ。

「小野」はこゝでは炭の產地たる固有名詞ではなく、たゞ小さき野のかなたといふ意であらう。野のかなたに藁屋が見え、そこから何やらひびいて来る、あれは消炭をつくる爲めに薪を割る音か、と軽く疑つたのである。

延寶年中（三十—三十八歳）

二日醉ものかは花のあるあいだ

(武藤氏短冊)

此句は晋風氏の「新編芭蕉一代集」にあるもので、氏の鑑識により延寶年中の作と認めてゐる、今そ

れに従ふ。

花が開いてから散るまでの間は眞の春である、何の二日酔を恐るゝものかは、須らくこの春を楽しむべし、といふ餘意をもつものである。

無常哉脂燭の烟破れ蚊屋

(平瀬氏短冊)

此句も前句と同じ理由でこゝにあげる。

脂燭の烟のなびき行くさま、破れた蚊屋のやがての果、何れを見てもげに世は無常なるかな、と詠歎したのである。

於君崎

松なれや霧ゑいさらゑいと引ほどに

(翁草)

元祿九年の「翁草」にあるが何年頃の作とも明かにしがたい、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に延寶年中とするに従ふ。

神奈川縣金澤に君が崎といふところがある、そこでの作であらう。

磯馴松の姿から思ひ浮んだので、霧がえいさらゑいと掛け聲しつゝ全力を盡す如くに引いてゐる、それによつてこたへる様こそげに松なれや、と詠歎したのである。

天和二年壬戌(三十九歳)

元日

くれくて餅を木魂のわびね哉

(歲旦發句牒)

くれくて餅を木魂のわび音哉

(句選拾遺)

天和二年の「歲旦發句牒」にある、「句選拾遺」には冬の部に收めてあるが、句ぶりからすればさう

一天和二年一

九一

するものが相當に思はれる、しかし「元日」と前書があれば歳旦の句と見るより外仕方がない。歳旦にしても實際は昨年即ち天和元年の所作であらうが、二年の歳旦牒にあるので今年の初めに置く。歳晚なれば「暮々て」を年が暮れ行くと見られるが、歳旦とすると日が暮々てと見なければならぬ。しかし正月早々餅をつくか何うか、この時代の風俗に就て更に研究してからでなければ何れとも斷定出来ないので、とにかく前書の「元日」に重きを置かねばならぬ。

日が暮れ／＼て（年だと都合がよいが）よその餅を搗く音を傍に聞く佗寐なるかな、と世俗の行事にかゝはらぬ生活の氣安さを云つたのである。

石河北鰐生のおとうと山店子、我つれ／＼慰めんと
て芹の飯煮させてふかゞはまで持來る、青泥坊底の
芹にやあらむと、其世の佗も今さらに覺ゆ。

我ためか鶴はみのこす芹の飯

（續深川）

晋風氏は「新編芭蕉一代集」に天和三年前としてゐるが、其前著「芭蕉句集定本」には天和二年と推定してゐる。天和二年十二月火災にかゝつた芭蕉は、甲州に旅して三年春はそこに過した、故に三年以前とするよりは二年以前とする方がよいと思ふ。

石川山店は「猿蓑」の「木瓜薊旅してみたく野はなりぬ」の作者である。
「青泥坊底の芹」は杜甫の七律、東山草堂中の「盤剝白鴉谷口粟、飯煮青泥坊底芹」から來たもので、「青泥」は長安の一驛名、「坊」は堤の意、そこの芹は時人の賞翫に値し、それを以て芹飯を製つたものと見える。

山店子が我徒然を慰めんとて、芹の飯を煮させて深川まで持つて來てくれた、これはかの杜甫の所謂青泥坊底の芹だらうと思はれて、其時代の氣分も今更に覚えられるといふのが前書で、句意は、鶴が我が爲めにか、芹飯にすべき料の芹を哺み残す、と山店に對しての挨拶に、其持つて來てくれた芹飯を青泥坊の芹かと由來つけ、また其芹は鶴の残したものと奇麗事に見なして、贈主の好意を謝したのである。

梅柳さぞ若衆哉女かな

(武藏曲)

「武藏曲」は天和二年の出版であるから、春夏季の句は二年の作と見る。

副詞「さぞ」には二義ある、一は「然ぞ」で「さぞ侍る」「さぞ云はゞ」の如く「其如くに」の意をなし、二は「嘸」で即ち「さぞかし」「さぞ美しからん」の如く推測の意をなす。此句は其第一の「さぞ」である。

然るに或は此句は上部に「さぞ」と推測したるものなる故に終止もまた推測の意にしなければならぬ「かな」と詠歎に結んだのは誤りであるといふ人がある。それに對して一方には、俳句は必ずしも文法の拘束を受けない、故にこれでもよいといふ者が出る。由來文法は拘束の規定ではない、我々が日常使用する正しき言語の中から一定の規格を發見し、それを標記したものそれが文法である。故に談話にしても文章にしても正しきものは自ら其法にかなふので、其法に背反して正しきものゝ有り得るはずはない。或は文法に反したやうでもそれは對象を正しく認識し得ざるからである。即ちこの句を解するに「嘸」を以てするから下を誤りと云はなければならなくなるのである。更に文法をどうでもよい

として此句を肯定せんとするもまた誤りで、お氣の毒ながら此句は少しも文法に反いて居らぬ。それをかれこれ云ふのは共に盲の垣覗きたるを免れない。

二十四番の春風は先づ第一に梅花をそゝのかし、やがて柳も耻かしさうに芽ぐみ初める、若しそれを人に擬してみたら何であらう、梅の凜々しく清香を吐けるはその如くに若衆なるかな、柳の嫋々としで風に吹かるゝはその如くに女なるかな、と詠歎したのである。

夕児の白ク夜ルの後架に紙燭とりて

(武藏曲)

前句と同じ理由で二年の作と見る。

或る夜廁に行かんと紙燭を取つて立つたが、ふと窓前の暗き中に夕顔の花の白く咲いてゐるのを見た、といふべきものゝ結尾を省略したのである。

ほとゝぎす正月は梅の花咲り。

(虚栗)

一天和二年一

九五

ほとゝぎす正月は梅の花ざかり。

(泊船集)

「虚栗」には芭蕉の「天和三癸亥仲夏日」といふ跋文があるので、夏秋冬の句は二年の作と見る。
三冊子に

此句は時鳥の初夏に、正月に梅咲ることを云ひはなして、卯月なるか、時鳥の聲はと願ふ心をあましたる一體也。

杜鵑一聲空に鳴き渡つて、早くも夏を告げ知らす、と見れば、樹々の梢は匂はしき嫩葉で、これも嘗て正月のころは、梅の花が咲いた梢である、といふのである。

清く聞ん耳に香焼て郭公

(虚栗)

前句と同じ理由で二年の作と見る。

香は鼻に嗅ぐものでありながら、聞香など、聞くといふ詞をつかふ、其縁をかりて、耳に香を炷いて時鳥の音を清く聞かん、といふので、これらは未だ貞門の舊套から脱し得ない作である。

青ざしや草餅の穂に出づらん (虚栗)

「青ざし」はもと青苧でつくつた縷であるが、青麥の粉で製り細く捩つた菓子がそれに似てゐるので其まゝ菓子の名に呼ばれ、俳句では夏季とする、其青ざしは草の穂に似てゐるので、ふと草餅を思ひ出して、青ざしはや草餅が穂に出でつらん、と想像したのである。

椹や花なき蝶の世すて酒 (虚栗)

前句と同じ理由で二年の作と見る。

一天和二年一

「椹」は日本の特訓で「さはら」とよむが。本義は「桑の實」で或は單に桑ともよむ。桑の實は稍木苺に似てゐて、小兒などが採つて食ふことがあり、或はそれを以て酒に釀すこともある。また佛門に入ることを桑門に入るとも云ひ、從て桑門を世捨人ともよむ。

桑の實はや浮世の花から遠ざかつた蝶の世捨酒ナラン、と前に記したくさ／＼の事を総合して想像したのであるが、これまた貞門の風を脱却しきれない。

雪 の 鮎 左 勝 水 無 月 の 鯉
(虚 栗)

前句と同じ理由で二年の作と見る。

句合は二句を左右に分ち、判者が勝負を定むるもので、此句はそれに擬して、右を雪中の河豚汁、左を盛夏の洗鯉として勝負を定める形式を擬したのである。

雪のころの河豚は、世俗に河豚は食ひたし命は惜しいといふほど賞美されるが、水無月の鯉の洗ひに到つては、更に一層上に位すべきものである、故に左を以て勝とす、といふのである。

あさかほに我は飯くふおとこ哉

(虚 栗)
和角蓼螢ノ句

前句と同じ理由で二年の作と見る。此句は前書にもある通り其角の蓼螢の句に和して作つたので、其蓼螢といふのは「草の戸に我は蓼くふ螢哉」の句で、二十二の血氣さかりで上戸の其角は、勢ひ朝よりは夜に親しみが深い、又蓼食ふ虫も好き／＼といふ世諺がある、其二つから、蓼くふ虫も好き／＼で夜を主とする螢かな、の意である。「芙蓉文集」に其角宛の書簡があつて、それには

「前略」右飲酒一枚起請は尊朝親王御作のよし承候、尤さる人の許に御直筆にてかけ物にして床にかゝり有之候、あまり／＼面白御作故ちよと寫し來候、貴丈つね／＼大酒をせられ候故、此御文句を寫して大酒御無用存候、仍一句「朝顔に我は飯くふ男かな」いかゞ、くはしき事は頓て御めにかゝり萬々可申述候、以上。

といふ手紙がある、即ち其角の大酒を心配して誠めたのである。

一天 和二年！

そなたは夜を愛する螢であるさうだが、我は朝顔に對して清々しき初秋の氣分を味ひながら飯を食ふ男なるかな、と自己の境地に就て詠歎したのである。

三日月や朝顔の夕べつばむらん
(虚栗)

前句と同じ理由で二年の作と見る。

くれ方のあの三日の月はや、朝顔の明日咲く用意に苔を作る如くに、やがての満月の用意に夕べに於て苔みを作るらん、と、眼前の三日月と朝顔の苔とからそこに或る類似點を見出して想像を走せたのである。

高山樂壇興行にて草庵の月見ける、洛の信徳素堂各佳作あり、素堂月見の記を書

月十四日今宵三十九の童部

(みつはくみ)

芭蕉の三十九歳は天和二年にあるので今年の作と見る。晋風氏は「新編芭蕉一代集」にこの句は猶考證を要すべきものとしてゐる。

高山樂壇は甲州の人で上州館林に居住してゐたといふ、二年十二月芭蕉庵が焼失して、芭蕉は甲州に旅行した、三年夏樂壇と一晶と甲州に芭蕉を訪つれて三吟歌仙が二巻ある。
月は満月にならぬ十四日、我は四十にして惑はずといふ其四十に満たぬ三十九の童である。と共にまだ若いことを云つたのである。

憶ニ老杜

髭風ヲ咲て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ
(虚栗)

前々句と同じ理由で二年の作と見る。

「老杜」は唐の詩人杜子美で杜詩七律中に「杖藜嘆世者誰子、泣血逆空回白頭」とあるのを憶つての作である。「髭風を吹て」は事實は髭を風に吹かせるのを更に勢ひ強く云つたのである。

一天和二年一

老杜は藜を杖にして世を歎するは誰か子ぞと云つたが、私は今鬚を風に吹かせて暮秋を歎するは誰が子ぞと、老杜に問ひかけて、當時世を慨歎した其老杜を憶ふといふのである。

手づから雨のわび笠をはりて

世。に。ふ。る。も。さ。ら。に。宗。祇。の。や。ど。り。哉。
 世。に。ふ。る。は。さ。ら。に。宗。祇。の。や。ど。り。哉。
 世。の。中。は。さ。ら。に。宗。祇。の。や。ど。り。哉。
 世。に。ふ。る。も。さ。ら。に。宗。祇。の。し。ぐ。れ。哉。
 (虚栗)
 (和漢文藻)
 (笈日記)
 (泊船集)

前句と同じ理由で二年の作と見る。「泊船集」に

此句五文字を世の中と笈日記にはしるされける、筆のあやまりなるべし。みなし栗の比也。
 とあり。「雪丸け」と「和漢文藻」には文章がある、晋風氏は其文勢から考證して「雪丸け」を前作とし、「文藻」を改作としてゐる、それがよいと思ふので「文藻」のものを掲げる。題は「漉笠の銘、並序」

とある。

草の扉にひとりわびて、秋風さびしきをり／＼竹取のたくみにならひ、妙觀が刀をかりて、みつか
 ら竹をわり竹をけづりて、笠つくりの翁となる。心しづかならざれば日をふるに物うく、巧つた
 なれば夜をつくしてならす。あしたに紙をかさね夕にほして、又かさね／＼漉といふ物をもて色
 をさはし、ます／＼堅からん事をおもふ。廿日すぐる程にこそやゝいできにけれ。其かたちうらの
 方にまき入、外さまに吹かへりしなど、荷葉の半ひらくるに似て、中／＼おかしき姿也。さらばす
 みがねのいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし、西行法師のふじ見笠が、東坡居士の雪見
 笠か、宮城野の露に供つれねば、吳天の雪に杖をやひかむ。霰にさそひ時雨にかたむけ、そぞろに
 めでゝ殊に興す。興のうちに俄に感する事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、かりのやどり
 に袂をうるほして、みづから笠のうらに書つけ侍る。

「宗祇」云々は、宗祇法師に「世にふるは更に時雨のやどり哉」といふのがある。それを借り來つて今世にふるも亦さらに宗祇法師の云ひけるごとき時雨のやどりかな、と宗祇の境涯に私淑して其感懷を自己の感懷に移し來つたのである。

後に杉風が深川の長慶寺にこの句の短冊を埋めて碑を建てた、これを短冊塚といふ。

貧山の釜霜に啼聲寒し
(虚栗)

前句と同じ理由で二年の作と見る。

釜鳴りの音といふものは一種寂寞の感じをさそふものである、それを「鳴る」と云はずに「啼く」としたのは釜に生命あるが如くにした作意である。

貧乏寺の厨で釜が霜夜に堪へ得ずして啼く、其聲がいかにも寒く聞かれる、といふのである。

茅舍買水

水苦く偃鼠が咽をうるほせり

(虚栗)

前句と同じ理由で二年の作と見る。

「莊子」の逍遙遊に「鶩鶠巢於深林不_レ過一枝、偃鼠飲河不_レ過_ニ滿腹」といふことがある、「偃鼠」は「どぶ鼠」で、どぶ鼠が大河の水を飲んでも自分の腹一ぱいより上は飲めないと、各自其分を知るべきことを云つたのである。

深川は水質が悪いので飲料水は賣りに來るものをして用にあてた。其買つた水を貯へて置いたら薄氷がはつた、汲んで飲んだら其氷がつめたかつた。それを強調して「苦く」と形容し、偃鼠即ち己の咽を潤した、といふのである。

夜着は重し吳天に雪を見るあらん
(虚栗)

前句と同じ理由で二年の作と見る。

宋の天聖年間閻僧可士が僧を送るの詩「一鉢卽生涯、隨縁度_ニ歲華、是山皆有_レ寺、何處不_レ爲_レ家笠重吳天雪、鞋香楚地花、他年訪_ニ禪室、寧憚寺岐賒」といふのがある、其笠を夜着に轉じて一句を其まゝとり用ひたのである。

或る夜衾を重ねて寐てそれを重しと思ひ、さらに何處か雪でも降つてゐるのぢらう、と思つたのを「吳天」の字を借り來つて修飾したのである。

天和三年 癸亥（四十歳）

まとふどな犬ふみつけて猫の戀
（茶草子）
またふ人な犬ふみつけて猫の戀
（菊の道）

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に天和三年説とするにしたがふ、
猫は犬を怖れる、しかしそれが戀するころは、愚直なる犬を踏みつけるやうにしてまでも浮かれて雌を呼びありく、と、詠歎したので、「まとふど」は愚直の意である。

勢。ひ。あり。氷。消。て。は。瀧。津。魚。
（新虚栗）

勢。ひ。なり。り。氷。消。え。て。は。瀧。津。魚。
（句解参考）
勢。ひ。あり。り。や。氷。柱。化。し。て。は。瀧。つ。魚。
（同）
勢。ひ。あ。る。山。部。も。春。の。瀧。つ。魚。
（同）

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に天和三年説とするに従ふ。

「解説参考」には「甲州郡内といふ瀧にて」と前書があつて、第三四是初案だらうとしてゐる。
水が涸れて氷柱になつてゐた瀧も、今や春も暖くなつて氷柱も解け氷も消えて、瀧のぼりする魚も勢ひがある、といふのである。

うぐひすを魂にねむるか嬌柳
（虚栗）

「虚栗」は天和三年の出版であるから、春季の句は三年の作と見る。
「一葉集」には「在原寺」と前書があるが、それは「虚栗」の其角の「美男村」の句の前書で、それ此句のものとしたのは誤である。

眠るが如き柳はまさに春を象徴する一幅の畫圖である、それに莊子が夢に胡蝶になつて飛翔したこと
を想ひ寄せて、あの嬌柳は莊子が魂を蝶にした如くに鶯を己が魂として眠るか、と詠歎したのである。

憂方知_ニ酒聖_一、貧始覺_ニ錢神_一、
花にうき世我酒白く食黒し
(虚栗)

前句と同じ理由で三年の作を見る。

一晶、嵐雪、其角、嵐蘭の五人で歌仙が一巻ある。「芭蕉翁眞蹟拾遺」に藤堂任口宛の書翰
追而申入候、内々之事は如何被成候哉、是もすてはおかれまじくやうに存候、貴丈にも萬事氣の付
人に候得ば定而ぬかりはあるまじくと存候、ひよと我らも口を添候故、心もとなく存候、ひきやく
便に様子等こまゝ御申越可被下候、夫に付此ほくいかゞ「花にうき世我酒白く食黒し」此は句の
こゝろに身持可被成と存候。(下略)

といふのがある。又前書は白樂天の「草合門無_レ徑、煙消_レ瓶有_レ塵、憂方知_ニ酒聖_一、貧始覺_ニ錢神_一」

の下二句をとつたのである。

「うき世」には二義ある、此句では其何れの「うき世」であるかを定めねばならない。「柳亭雜記」に
浮世といふに一二あり、一は憂世の中、之は誰々も知る如く歌にも詠て古き詞なり一の浮世は今様とい
ふに通へり、浮世繪は今様繪なり、浮世の人みな是なり、此事醒翁の浮世袋の考にあればくはしくは
云はず、浮世狂といふは遊女藝子にもかぎらずすべて女に戯れあそびありく事をいふ、故に俳諧にて
は戀とするなり、平安紀行(文明十二年太田持資)「みるたびにおもしろければ富士の根の雪はうき
世の姿なりけり」うき世の姿是則今様の姿なり、文明の頃よりはたしかに一方の浮世の詞あり(下略)
この句の「うき世」は第二義の方である。

今や花は爛漫と咲きほこり人々は皆當世様に粉飾して行樂に耽つてゐる、其中に我が酒はどびろくで
あり又飯の米は黒い、と自己の恬淡な生活を云つたので、世俗の風には同化せられないが、春光を贊
美することに於ては人々に劣らぬ、といふ餘意をふくんでゐる。或は此句を自己の境遇に甘んぜざる
述懐と見る人もあるが、任口宛の書翰にも「此發句の心に身持可被成」とある、愚痴や述懐を他にす
ゝめるはずがない。

畫

讀

馬。ほくく。我をゑに見る夏。野哉

(水の友)

馬。ほくく。我を繪に見る枯。野哉

(泊船集)

夏。馬。ほくく。我を繪に見る心かな

(一葉集)

夏。馬。の遅行。我を繪に見る心かな

(同連句)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」は發句の部に第一を貞享元年説とし、連句の部に第四を天和三年作とし、文章の部及書翰の部に第一を貞享二年としてゐるのは何かの説があるのだらうが、「一葉集」に「夏馬の遅行」を發句に、廩塙の脇、一晶の第三で、三吟の歌仙があるのを以て、其句が天和三年に廩塙と一晶が相伴うて、甲州に流寓中の芭蕉を訪ねた時の作と見るべきものであらう、即ちむしろ晋風氏の前著「芭蕉句集定本」の天和三年説を可とする。「三冊子」には第一をあげて

はじめは「夏馬ほくく我を繪に見る心かな」と有り、後直る也。

とあり。「泊船集」には第二をあげて

此句「夏野哉」とも或人申されし

とあり。「水の友」には第一をあげて

かさ着て馬に乗たる坊主は、いづれの境より出で、何をむさぼりてありくにや。このぬしのいへ
る是は予が旅のすがたを寫せりとかや。さればこそ三界流浪のもゝ尻、おちてあやまちすることな
かれ。

と畫讀の文があり。柏水宛書翰

追而申入候、昨日の御報に失念故又々申入候、木曾路にてほ句の事此度は日數の間も無之故、ほ句
も一二三句ならでは不致候、其くせ不出来に候、漸く淺間邊にて「馬ほくく我を繪に見る夏野哉」
此句計かと存候、(以下略)

とある、此狀を晋風氏の貞享二年とするのは違つてゐると思ふ、又これを前作と見ると「三冊子」の
改作説と矛盾し、「一葉集」の連句とも合致せず、さりとて「夏馬の遅行」と「夏馬ほくく」が全く
別の句とは云はれず頗る此間の消息に苦しむ、それで自分は此書翰が無かつたら、「夏馬の遅行」「夏

馬ほくく「馬ほくく」の順序に改作したものと認められて、大に都合がよいと思ふのである。

「泊船集」の「枯野哉」は誤りである。又「一葉集」發句部には前書が

甲斐の郡内といふ處に到る途中の苦吟

とある。すべてを綜合して「水の友」の畫讀としての第一の句が一番穩當である、と思ふのでそれによつて解を下す。

馬蹄ほくくと運ばせて行く我が侘びたる姿を今再びこの畫中に見る夏野なるかな、といふのである

雲霧の暫時百景を盡しけり

(芭蕉句選拾遺)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には發句の部に天和三年説とし、文章の部に貞享元年作とあるが「芭蕉句選拾遺」に次の文章と此句とがあつて、其末に

甲州吉田の山家に所持の人ありしを、今東武下谷菊志秘藏なるよし、行脚祇法より傳寫して出す。とある、それらから天和三年甲州に旅寐中の作を見るがよからう、文章とは

嵐山は遠く聞、蓬萊方丈は仙の地也。まのあたり土峰地を抜て蒼天をさゝえ、日月の爲に雲門をひらくかと、むかふところ皆表にして美景千變す、詩人も句をつくさず、才士文人も言をたち、畫工も筆を捨てわしる。若覗姑射の山の神人有て、其詩を能せんや、其繪をよくせん歟。遠き嵐山、仙人の蓬萊方丈はいざ知らず、今眼前に聳ゆる我富士が嶺は、忽焉として雲を出るかと思へば、たちまちにして霧これをつゝみ、しばしの間にも百變の景色を展開し盡しけり、と富士の靈峰を贊美したのである。

南もほとけ草のうてなも涼しかれ

(續深川)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に天和年中とあるが、自分は、天和三年夏芭蕉庵再興直後に、其事に盡力した鳥居文鱗が贈つたものと見る。猶句のあとに「くだれる世にもと云けん断りなれや」と追記がある。

「かれ」は命令「涼しくあれ」の音便ではなく、「涼しかり」の第三終止即ち起辭「こそ」に照應しての「涼しかれ」であることを特記して置く。「南も」は「南無」と同じく佛を禮讃する詞。南無釋迦牟尼佛、こゝに尊像を安置して日夕慈顔を拜し心に御法を聽問することが出来る、かくてこそ我がこの草のうてなも涼しかれ、と佛徳に親炙し得るの欣びをのべたのである。

ふたゝび芭蕉庵を造りいとなみて

あられさくやこの身はもとのふる柏

(續深川)

前書に由つて三年の作と見る。

柏は枯葉になつても被を離れずについてゐる。火災後素堂及門人たちの盡力で再び深川の芭蕉庵が出来た、そこに入つての或日、霰のはら／＼と降る音を聞き、この新しい庵に入つたが、この身はもとの古柏である、と舊態を離脱することの出来ぬ心境を抒べたのである。

陸奥名所、男鹿嶋

ひれふりてめじかもよるや男鹿嶋

(五十四郡)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に天和三年説とするに從ふ。

「ひれ」は「領布」と書く往古の風俗に婦人が頂にかけて飾とする帛で、松浦佐用姫が夫大伴狹手彦との別離を悲しむ圖などにあるひら／＼したものがそれである。こゝではたゞ戀ひ寄る動作と見るべきものである。

牡鹿嶋だからひれふりてめじか鮒も寄るやナア、と地名の牡鹿から鹿の雌に鮒の名をあしらつたものである。

同、猫山

山は猫ねぶりはいてや雪のひま

(五十四郡)

一天和三年一

一一五

前句と同じ理由で三年とする。

山は猫といふ名を負うてゐる、其の山の雪がところ／＼消えてゐる。それは猫が舐り剥いてにやあらん、と山の名から想像して山眠の季題でよんだのである。

同、黒 森

黒森はなにといふとも今朝の雪

(五十四郡)

前句と同じ理由で三年とする。

黒森は何といふたところで今朝の雪には白森だ、といふのである。

天和年中（三十八——四十歳）

人 日

よもに打薺もしどろもどろ哉

(續深川)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に天和年中の作とするに従ふ。

「よも」は「四方」、また「よ」は「し」である、それで四方に打つ音の不そろひなことを表すために、「よも」を二つに分け「しどろ」「もどろ」としたのである。

仙風が悼

手向けり芋ははちすに似たるとて

(續深川)

前句と同じく晋風氏の考證により天和年中とす。

仙風は杉風の父杉山市兵衛であらう。

一天和年中一

芋の葉は其形がどこやら蓮の葉に似てゐるとして、今宵の魂祭にそれを手向けゝり、といふのである。

何ともまねぎ果たるすゝき哉

(續深川)

前句と同じ理由で天和年中とする。

薄の風になびくは何うやら人を招ぐやうに見える、それが今は總ての物を招ぎ果てたる如くしづまつて終つた薄なるかな、と詠歎したのである。

土屋四友子を送りて鎌倉までまかるとて

霜をふむでちむば引まで送りけり

(茶草子)

四友は通稱土屋外記、松平出羽守家の臣、宗因門。

句は何の解釋をも要せぬほど平明である。

天和四年、貞享元年(甲子四十一藏)

二月廿一日貞享と改元

似。合。し。や。新。年。古。
春。立。や。新。年。ふ。る。き。米。五。升。
年。立。や。新。年。ふ。る。し。米。五。升。
立。や。新。年。ふ。く。べ。米。五。升。

(鶴尾冠)

(三冊子)

(泊船集)

(芭蕉句選)

此句は「芭蕉翁發句集」に貞享元年の作とし、「一葉集」は貞享の巻頭にかゝり、晋風氏の「新編芭蕉一代集」「大系本芭蕉一代集」「芭蕉句集定本」何れも亦貞享元年とあるので、それらに従てこゝに置く、しかし許六の「鶴尾冠」に

一天和四年、貞享元年—

一一九

越人曰、此發句は芭蕉江府船町の囂きに倦、深川泊船堂に入られし。年の作なり。堂のうち茶碗十、菜刀一枚、米入るゝ瓢一つ五升の外不入、名を四山と申候、といふ附記がある。芭蕉の深川入庵に就ては年代に諸説があるが、何れにしても貞享元年の前年即天和三年とするものがない、越人が云ふところの「次の年」を正しとすれば

梨一説 入庵 延寶六年 次年は 延寶七年
支考説 許六説 延寶八年 天和元年
素蓮説 天和二年

何れも合致しない。「鵠尾冠」の編者許六は八年の説を執つてゐるからには。彼が越人の言に聞いて此句を天和元年の作としてゐたであらうことは無理な推測とは云はれまい。かく見來る時は越人の言を抹殺し得ざる限り、貞享元年の作とする根據が大分あやしくなつて來ることを免がれない。「三冊子」に

此句、師の曰、「似合しや」とはじめ五文字あり、口惜事也といへり。其後は「春立や」と直りて

短冊にも残り侍る也。

とある。

初作では、何等世俗の慣はしに煩はさることもなく無用の調度もなく、米櫃即ち五升入の瓢にはこの新年に昨年來持越の糧米がある、それらがいかにも佗び人の新年に似合しや、と自己の境遇に満足してゐるのである、その「似合しや」が説明に傾くので改めて「春立や」としたのであらう、併し改作では上五の主觀的文字がなくなつたので感受が違つて來る。天和三年は閏年であつたから翌四年の元日は立春より後れて年内立春である。そこで、今日春が立つた、我瓢には新年を迎ふべき貯への古き五升の米がある、と他に欲望もない恬淡な氣分を云つたことになる。「新年古し」では「古し」が新年にのみかかるので更に別の意になる「新年ふくべ」と共に誤りであらう。

もの一我が世はかるきひ。さ。こ哉 (乘集)
ものひとつ瓢はかるき我世。かな (隨齋諧話)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に貞享元年説とするに従ふ。

此句は、米入の大瓢に素堂が銘を作り、芭蕉が更に文を作つて四山瓢と名つけた時の句で、季題の瓢でなく雑の句と見るべきものである。成美の「隨齋諧話」に芭蕉真筆の

瓢之銘

山素堂

一瓢重_二黛_一山自笑稱_二箕_一山

莫慣首_二陽_一餓

這中飯_二顆_一山

韻公の垣穂におへるかたみにもあらず、惠子がつたふ種にしもあらで、我にひとつひさごあり。是をたくみにつけて花入るゝ器にせんとすれば大にしてのりにあたらず。さゝえに作りてさけをもらむとすればかたちみる所なし。あるひとのいはく、草庵のいみじき糧入べきものなりと。まことによもぎのこゝろあるかな。やがてもちるて隱士素翁にこふてこれが名を得さしむ。そのことばは右にしるす。其句みなやまとおくらるゝがゆへに四山とよぶ。中にも飯顆山は老杜のすめる地にして李白がたはぶれの句あり。素翁はくにかはりて我貧をきよくせむとす。かつむなしきときはちりの器となれ。得る時は一壺も千金をいだきて黛山もからしとせむことしかり「もの一つ瓢は

からき我よかな」芭蕉桃青書。

といふ文章がある。

物に拘束されない氣安い生涯をのべたものではあるが、「瓢はからき我世」といふよりも、「我世は軽き瓢」とした方が詩味が饒かである。

或人のかくれ家をたづね侍るに、あるじは寺に詣でけるよしにて、とし老たるおのこ獨、庵を守りゐける。垣穂の梅盛りなりければ、これなんあるじ頗なりと云ひけるを、かのおのこ、よその垣穂にさぶらふと云をきゝて。

るすに來て梅さへよその垣穂かな

(之乎利)

留守に來て梅さへよその垣根かな

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」には貞享元年とし、晋風氏の「芭蕉句集定本」「大系本芭蕉一代集」には共に元年としてある、然るに同氏の「新編芭蕉一代集」には三年説としてある。其元年説に従ふ。「句選拾遺」には前書が「淺草或人の庵にて」とある。

折角深川から淺草まで尋ねて來たのに、あるじは不在で、其上にほめた梅さへ餘所の垣根なるかな、と失望のあまり詠歎したのである。

あさくさ千里かもとにて

苔汁の手ぎは見せけり 淺黄椀

(茶草子)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元年説とあるに従ふ。千里は通稱油屋喜左衛門、大和の人、芭蕉門、其千里が淺草に住んでゐた、そこを訪ねての句である。

千里は師の來訪をよろこんでもてなしたことであらう、それで淺黄色の塗椀に、土地名物の海苔シラフをあしらつた羹スープをすゝめた、それを「手際見せけり」と賞美したのである、蓋し羹は千里自身がつくつて

すゝめたのであらう。

艶なるやつこ花見るや誰歌のさま

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」に貞享元年とする説に従ふ。しかし、句ぶりから考ふるにもつと遡るべきものと思ふ。「艶なる奴」は前に天和元年の部に記した通り、男色を兼ねての小草履取である、句やかに粧うた若衆が、爛漫たる花の下にうつとりと梢を仰いでゐるのはや、そもそも誰がよんだ歌のさまナラン、とひそかに心の中に疑つたのである。

世にかかる花にも念佛申けり

(芭蕉句選拾遺)

これも「句選拾遺」の貞享元年とする説に従ふ。

老人は南無ムツといふのが口癖になつて、今を盛りと咲いてゐる花を見ても、例の念佛を申しけり、

—貞享元年—

一二五

といふのである。

奈良七重七堂伽藍八重さくら

(泊船集)

「芭蕉翁發句集」に貞享元年とするに従ふ、しかし貞享元年春は江戸に居り、八月發足して大和に遊んだのだから、此句を元年とすれば現地に於ての作ではないといふことになる。さりとて元禄元年奈良に足跡を印したのは夏であるらしいので其時でもない。それで晋風氏の「芭蕉句集定本」には教科書に採られて俳句文學の一教材となつてゐるほど有名である。風國の外に門人支考は古今抄に疊字の格を此句に就いて論證してゐるし、漢字づくしの形式をめづらしがられて、芭蕉の作なることを疑ふものは殆どないと云つてよい。然るに風俗文選大註解の著述に身代を潰した葎甘介我は、俳諧あやめ草に、作者は推本才麿だと云つて、芭蕉ではないと強く否定してゐる。介我の説を無條件で承認し難いが、芭蕉生前の諸集に見あたらないので確實性に乏しい事は云ひ得る。かうして一度疑はれた作を芭蕉の俳句中に存置するのは甚だ不本意故、才麿の作に直ちに左袒する譯ではない

が暫く問題として置かう。

と疑問にしてあるが、後著「新編芭蕉一代集」には貞享元年説として、其確實説を肯定してゐる。要するに此句は才麿の作たる確證の出て來ぬ限り、先づ芭蕉の作と見るべきもので、たゞ花の頃奈良に足跡を印してゐないので、實感の句ではなく會遊の記憶を呼び起しての作品とせざるを得ない。

支考は「古今抄」に「奈良七重」を疊字の格といひ、許六は「宇陀法師」に五七五の三段切の格だと云つて居る。「奈良七重」は、奈良に都を遷したまへる元明天皇から、桓武天皇の平安遷都まで御代が七代になる、その七代を下の「八重」に調和せしむる爲めに「七重」としたので、「重」にもまた「代」の意がある。また「詞花集」の「いにしへの奈良の都の八重さくらけふ九重に匂ひぬるかな、伊勢大輔」からの影響をもうけてゐる。

奈良は昔七代のみかどの都のあとで、其名残に今猶寺々の七堂伽藍と八重櫻が見られる、といふのを總ての天爾遠波と動詞、助動詞とを省略し去つたのである。

もろこしの俳諧とはん飛ぶ小蝶

(芭蕉句選拾遺)

—貞享元年—

一二七

「芭蕉句選拾遺」には貞享元年の作とし、また「莊子の畫贊也」と註してあり。晋風氏は「新編芭蕉一代集」に猶考證を要すべきものとしてゐる。

莊子は孔孟に對して老莊と併稱され、孔孟とは異つた學派の人である、其人の著「莊子」の中に莊子自身が夢の中で蝶になつたといふ一節がある。それで莊子を画くには多く彼が眠つてゐるほどに蝶の飛んでゐるさまを以てする、この畫もそれであつたのだらう。畫中の蝶即ち莊子よ、汝に彼國の俳諧即ち詩を問はう、と呼びかけたので、問うてみようと思つたのではない。

忘れずば 佐夜の中山にて涼め

(丙寅紀行)

風瀑の「丙寅紀行」に

小夜の山淋し、芭蕉翁をとし予に餞して「忘れずば小夜の中山にてすゞめ」其れは水無月中の頃、今日は若葉の彌生にて柳の綠青し。

とある、丙寅は貞享三年なるが故におとしは即ち貞享元年である。

小夜の中山は東海道五十三次の遠州金谷と日坂の間の山道で、夜泣石で知られてゐる。又其近くには菊川の宿があつて、そこには承久の昔北條氏に囚へられて東國に送られる途中「昔南陽縣菊川、汲下流而延命、今東海道菊川、宿西岸而終生」と書き残して空しく兎刃に斃れた中御門宗行卿の墓もあり、また元弘には同じく幽囚となつて東に送らるゝ時そこで「いにしへもかゝるためしを菊川の同じ流れに身をや沈めん」と詠んだ藤原俊基卿があり、また「年をへてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山 西行」「忘れぬや萱が軒端に雨もりて袖ひきかねる菊川のやど同」などの歌もある。

風瀑よ、君が若し古人を追憶することを忘れずば、必ず小夜の中山で涼んで、懷舊の情を味ひたまへ、といふのである。

白芥子や時雨の花の咲きづらん

(鶴尾冠)

「芭蕉翁發句集」に貞享元年とするに從ふ。

（貞享元年）

白雲栗の花はや時雨が花に咲きつるらん、と其花の色及びたちまちにして散ることから連想しての主觀である。

わが宿は四角な影を窓の月

(小文庫)

「芭蕉翁發句集」に貞享元年とするに従ふ。

我宿は窓の月が四角な影を室内に作つてゐる、といふので、月光を妨げる何等の調度のないことがうかゞはれる。

貞享甲子秋八月江上の破屋を立てる程、風の聲そよ

ろ寒けなり

「野ざらしをこゝろに風のしむみかな

(甲子吟行)

貞享元年八月、強健ならぬ芭蕉は一大決心を以て長途行脚を思ひ立つた。幸ひ舊里大和に歸る千里を道つれとたのんで、東海道から伊勢を經て郷里伊賀に入り、それから吉野、近江、美濃、尾張を巡つて、再び伊賀に引かへしてそこで越年し。二年には奈良、京都、近江、尾張から木曾路に入り、甲州を過ぎて夏深川の庵に歸つた。この紀行を干支に因んで「甲子吟行」と云ひ、また巻頭の此句に由つて「野晒紀行」ともいふ。此行名古屋で野水、荷舟、重五、杜國との五歌仙がある、それが即ち「冬の日」で、「芭蕉七部集」の第一に置かれ、所謂正風の俳諧はこの年から色彩がいよいよ鮮明になつた來たのである。

「野晒」は原野に晒らされたる臘體。

①草を敷寝の旅枕、いづこいかなる野の末に一片の白骨と晒らされるかも知れない、それを覺悟の門出に、秋風のひやくとしむ身なるかな、と長途の旅に出る心さびしさを詠歎したのである。

秋十とせ却て江戸をさす古郷

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第二句で、前句と同じく首途吟である。

寛文十二年に江戸へ下つてからは十二年め、延寶四年の歸省からは九年め、何れにしても概しては十年と云ひ得る。其十年の春秋を江戸に過した身の、故郷を訪ねやうと旅立つ今は、却て知友の多いこの江戸を故郷とさす思ひである、といふので、唐の賈島の「寄舍並州已十霜、歸心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却望並州是故郷」からの影響を受けてゐる。

關越ゆる日は雨降りて山みな雲にかくれけり

霧しぐれふじを見ぬ日ぞおもしろき

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第三の句。關は箱根の關。

霧が時雨のやうに盛んで富士の嶺が見えぬ。しかし其富士を見ぬ日ぞ、見えるよりも更に一層おもしろき、と山路の霧の風情を讃美したのである。

富士川の邊を行くに、三ばかりなる捨子の哀げに泣くあり。此の川の早瀬にかけて浮世の波を凌ぐに堪へず、露ばかりの命待つ間と捨て置きけん。小萩がものとの秋の風、今宵や散るらん明日や萎れんと、袂より喰物投げて通るに。

猿を聞人すて子に秋の風いかに

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第四句。

猿の聲が哀愁の心をさそふことは漢詩和歌に屢々歌はれてゐる。其猿の聲を聞いて哀愁を催す人よ、今この河畔の捨子に秋風蕭々と吹き渡るのを見たならば、其感慨果していかはかりなる、と自己が哀愁を催したにつけて世人も亦然らんと想像して、誰人に對つてとはなしに喚びかけたのである。

眼 前

—貞享元年—

みちのべのむくげは馬にくはれけり。

(甲子吟行)

道の邊の槿は馬の喰ひけり。

(伊達衣)

道のべのむくげは馬にくはれけり。

(歴代滑稽傳)

道はたのむくげは馬にくはれけり。

(一葉集)

「甲子吟行」中の第五句。直前に大井川を渡る記事があり、直後に小夜の中山の句があるから、此句は大井川から佐夜中山までの間の吟である。

道のほとりに木槿が咲いてゐる。木槿は槿花一朝の榮など、云はれて、たゞ一日を命とするはかない花である。其の道の邊の木槿はさらにまたむさくと我のる馬に食はれてしまつた、と眼前の出来事を叙したのである。許六は此句を正風の眞髓と贊歎し、素堂は此吟行中の白眉と賞してゐる。或は此句を道學的に道端に出るから食はれたので、人も出過ぎてはならぬ、と云ふ如くに解釋されることは、芭蕉にとつて迷惑千萬である。

二十日あまりの月かすかに見えて、山の根際いとくら
きに、馬上に鞭をたれて、數里いまだ雞鳴ならず、杜
牧が早行の殘夢、小夜の中山に至て忽驚く。

馬に寝て殘夢月遠し茶の煙

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第六句。前書の「鞭をたれて」以下は總て杜牧の早行歌「垂鞭信馬行、數里未
雞鳴、林下帶殘夢、葉飛時忽驚、霜疑孤雁回、月曉遠山橫、僅僕休辭險、何時世路平」
から出でゐる。馬上猶未だ昨夜の夢の名残り心に、小夜の中山にかゝつた、時に月は漸く西の空に落ちんとして遠く、あたりの人家には早くも炊煙が見える、といふので、いかにも秋涼の頃の曉け行く空を馬上に仰ぎつゝ過ぐる旅の情緒が偲ばれる。

田中の法藏寺にて

刈あとや早稻かたくの鳴の聲

(笈日記)

—貞享元年—

一三五

「芭蕉句選年考」には何れの年の吟なるやを知らず、とあるが晋風氏の「新編芭蕉一代集」の貞享元年説としてあるに従ふ。併し或は元禄二年ではなからうかとも思ふ。

法藏寺は尾張鳴海在田中にある巨刹である。見渡した田面の一部分は既に刈られ、又一部分は刈られぬ早稻も残つて、其かた／＼即ち片手に鳴の聲がする、といふ純客觀の句である。

(前略) 暮れて外宮に詣侍りけるに、一の鳥居のかげ
ほのくらく、御燈處々に見えて、また上もなき峰の松
風身にしむばかり、深き心をおこして。

みそか月なし千とせの杉を抱嵐

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第七句。「又上もなき峰の松風」は「異本山家集」の「深く入りて神路の奥をたづねればまた上もなきみねのまつかぜ、西行」から出でる。素堂の此紀行の跋文に

行き／＼て山田が原の神杉を抱き、また上もなき思ひをのべ、何事のおはしますとは知らぬ身すらも泪下りぬ、

とあるのによると、作者自ら神杉を抱いてみた如くに思はれるが、句の上からは嵐が杉を抱いたものと見る方がよからう。折から八月晦日で月はない。その眞闇の中に風音が千歳を経た杉を搔き抱く、と眞秘な光景に打たれての感受である。

西行谷の麓にながれあり、女どものいも洗ふを見るに

いもあらふ女西行ならば歌よまん

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第八句。

里の女が芋を洗つてゐる。所の名から連想して、西行ならば此鄙びた光景にめでゝ當に一首あるべきところだらう、と思つたのである。

其日のかへるさ或茶屋に立よりけるに蝶と云ける女あ
が名に發句せよといひて白き絹出しけるに書つけ侍る。

蘭の香やてふのつばさにたき物す

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第九句。「三冊子」に

此句は、ある茶店のかたはらに道やすらひしてたゞすみありしを、老翁を見知り侍るにや、内に請じ、
家女料紙持出て句を願ふ。其女のいはく。我は此家の遊女なりしを、今はあるじの妻となし侍る也。
先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし。其頃難波の宗因此處にわたり給ふを見かけて、句をねがひ請た
ると也。例おかしき事までいひ出て、しきりにのぞみ侍ればいなみがたくて、かの難波の老人の句に
「葛の葉のおつるの恨夜の霜」とかいふ句を前書にして、この句遣し侍るとの物語也其名をてふとい
へばかくいひ侍ると也。老人の例にまかせて書捨たり、さの事も侍らざれはなしがたき事也と云り。
とある。紀行には簡単であるが、たゞ立ち休らうた茶店ではなく、遊女あがりのうまい口前でいや應
なしに書かされたものと見える。

「たきものす」は燻香を衣などに炷さしめること。

蘭も蝶も實在のものではなく、宗因が女の名の鶴を落るにかけた作に擬して蝶と云ひ、また季節の蘭
を配したのですべてが主觀である。隨て此句は、蘭の香が蝶の翅に燻物すといふことを想像したので、
定めてゐるのではない。即ち蘭の香がや蝶の翅にたきものすラン、と妻に引上げた主の好意を蘭の香
に譬喻し、それが蝶の翅に伽羅を燻きしめるだらう、といふのである。事實が事實であるだけに一句
に或る崇重さと淳朴さがない、其代り技巧の洗鍊を盡して、後の天明調の俑をなすものであらう。

閑人の茅舎を訪て

萬植て竹四五本のあらしかな

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第十句。「笈日記」伊勢の部に「盧牧亭」と前書がある、閑人とは即ち盧牧である。
小庭には萬かつらが植ゑてあり、竹も四五竿あつて、それにさら／＼と吹き渡る嵐なるかな、と詠歎
したので眞目のもゝである。

—貞享元年—

長月のはじめ故郷に歸て、北堂の萱草も霜枯れ果て跡
だになし。何事もむかしにかはりて、はらからぬ白
く眉皺よりて、只命有てとのみひて、ことの葉もな
きに、兄の守袋をほどきて、母の白髪おがめよ、浦嶋が
子の玉手箱、汝が眉もやゝ老たりとしばらく泣て。

手にとらば消ん泪ぞあつき秋の霜

(甲子吟行)

「甲子吟行」の第十一句。

九月上旬に十年ぶりで郷里に歸つてみると、母は己に故人となり、兄は双鬢が白くなつてゐて、只幸
に命あつてとばかりで外に言葉もなく、守袋を開いて母の遺髪をとり出し、これを拜め、浦嶋の玉手
箱を開きし如く、お前も大分年をとつたと云はれて、母のかたみの白髪を、臨終にも在りあはなかつ
た不孝者が今手にとらば、忽ち秋の霜の如くに消えんと思ふほどに涙ぞ熱き、と潸然たる涙の中に思

つたのである。

大和國に行脚して、葛下郡竹の内と云所に至る、此所
は例の千里が舊里なれば、日頃とゞまりて足を休む。

數より奥に家有。

綿弓や琵琶になぐさむ竹のおく

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第十一句。竹の内は現今は葛城郡磐城村である。「數より奥に家有」は千里の家が數の奥
にあるのではなく、千里が家の數より奥に更に隣家があるとの意、綿弓は繰縫を打つ弓状の器具である。
千里が家の数の奥に更に家があつて、其家の主はあのビツビン／＼と響く綿弓の音をや、琵琶の音と
も聞きなして氣品高く慰むナラン、と其主の人格を想像したのである。其主といふのは「國名盡」に
大和國竹の内といふところに日頃とゞまり侍るに、其里の長なりける人朝夕問ひ來りて旅の愁を慰
めけらし。誠其人は尋常にあらず、心高きに遊んで身は芻堯雉兔の交を爲し、自ら鉢を荷ひて淵明

が園にわけ入、牛を牽て箕山の隠士を伴ふ。且其職を勤て職に倦まず、家は貧しきを悦んでまどしきに似たり。唯是市に閑を偷んで閑を得たらん人は此長ならん。

と賞讃してゐる村の長其人である。藪の中の千里の家で綿弓の音を琵琶とも聞いて芭蕉自身が旅情を慰めた、といふやうに上すべりに見てはならぬ。

冬しらぬ宿や糲する音あられ

(一葉集)

「一葉集」に「興或人文」として

大和國長尾の里といふ處は、さすがに都遠きにあらず、山里にして山里にあらず。あるじ心あるさまにて、老たる母のおはしけるを其家のかたへにしつらひ、庭前に木草のおかしげなるを栽置て、岩尾めづらかにすゑなし、手づから枝をため石を撫てば、蓬萊の嶋ともなりぬ。いく葉とりてんよと老母につかへなぐさめなどせし實ありけり。家まづしくして孝をあらはすとこそ聞なれ。まづしからすして孝を盡す、古人もかたきことになんいひける。

として此句がある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」には俳句の部には年代不明として、また考證を要するものとしてゐる、然るに文章の部には元祿元年作として

一葉集に收めた以前の古版本に所見がない。元祿元年「笈の小文」の紀行の時に作つたのだらう。と記してある。「野晒紀行」によれば貞享元年八月江戸を發ち、千里の郷里大和の竹の内村に行つたのは晚秋であり、二度目は「笈の小文」の旅で、貞享五年三月十二日に竹の内村に行つたことは猿雖宛の書簡で知られる。長尾は竹の内と隣接の地であるから、この二回の内のいづれかの折でなければならぬ。而して季題の關係から推測するに貞享元年の晚秋であらうと思はれる。

糲をする音を霰とも聞きなして、冬を知らぬあたゝかき宿やナア、と兼ねては、貧しからずして孝を盡すこの家庭の温か味を詠歎したのである。

二山上當麻寺に詣で、庭上の松を見るに、およそ千とせ
も経たるならん、大さ牛を隠すとも云べけん、かれ非情
といへども、佛縁にひかれて斧斤の罪をまぬがれたるぞ

一貞享元年一

僧朝がほ幾死かへるのりのまつ

(甲子吟行)

幸にして尊し。

「甲子吟行中」の第十三句。

蓮の曼荼羅で名高い大和の當麻寺に來て見ると、庭前に千年も經たらうと思ふ古松がある。草木非常のものながら縁にひかれてかくも年經にけるかと尊く思はれる。其法縁ある松を見るにつけて思ふのは、この松がかく迄大きくなる間に、一朝の榮と云はれる朝顔は幾度咲きかへることか、それに比しては齡永しと云はれる人間此寺の僧も幾度死かはることか、と詠歎したのである。

ひとり芳野のおくにたどりけるに、まことに山深く白雲峰に重り煙雨谷を埋めて、山賤の家處（）にちいさく、西に木を伐音東にひゞき、院々の鐘の聲は心の底にこたふ。昔より此山に入て世をわすれたる人のおほくは詩にのがれ歌にかかる、いでや唐土の盧山といは

むもまたむべならずや。ある坊に一夜をかりて。

砧うちて我にきかせよや坊が妻

(甲子吟行)
(曠野)

「甲子吟行」の第十四句。吉野には妻帶の寺がある。また砧は「新古今集」の「みよし野の山の秋風

さ夜ふけて古里さむくころも撃つなり、雅經」などを思ひよせたのであらう。

終日みよし野の秋の静寂さを味はひ來つた我に、坊が妻よ、夜はまた砧を打つて更に夜の凄寒を味はせよや、と切に望んだのである。「よ」とばかりでは希望の意でもありまた命令の意にもなる、「よや」と懇ろに望む方が遙かによい。

西上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二町ばかりわけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかにありてさかしき谷を隔たるいと尊し。かのとくくの清水はむかしにかはらずと見えて今もとくくと零落ける。

（貞享元年）

露とくく心みに浮世すゝがばや

(甲子吟行)

もしこれ扶桑に伯夷あらば必口をすすがん、もし是許由に告けば耳を洗ん。

「甲子吟行」中の第十五句。「とくくの清水」即ち「苔清水」に就ては「西行名所圖繪」大和の部に「とくくと落る岩間の苦清水汲ほすほどもなき住居かな」といふ歌あまねく人の耳にあり、これを西行の歌とおもふは大なるひがごとに一向なき事なり。とかく名高き人の上は後の世にあとなき事をいひ出て附會すること多し。

とあり。又「山家集」に「淺くともよしやまた汲む人もありし我にこと足る山の井の水、西行」とある。「とくく」の歌が西行でなくとも、さう一般に云ひ慣はされ、清水その物もさう名を負つてゐるので、芭蕉は其一般的觀念に隨つてゐるのである。「扶桑」には諸説あるがこゝでは日本の意。「伯夷」は殷の遺臣で周の栗を食むを潔しとせず首陽山に入つて餓死した人。「許由」は堯から天下をら譲うといふ話を聞かされて、汚れなりとして穎川に耳を洗つた人。「露」は清水の量の少いのと、兼ねて季節とて草木に置けるそれをも表はしてゐるのである。

とくくと今猶西上人の歌の如く零ちつゝあるこの苔清水に、我も世の俗塵を濯ぎ試みばや、といふので、更に、日本に若し伯夷や許由が居つたらかならずこの清水を清しとして口を嗽ぎ耳を洗ふたらう、と感慨を附記したのである。

山をのぼり坂を下るに秋の日既になめになれば、名

ある處々見残して、先後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年をへてしのぶは何をしのぶ草

(甲子吟行)

御廟千とせしのぶは何を忍草

(孤松)

「甲子吟行」中の第十六句

「忍」は今釣忍にするものと、石の肌、樹木、軒端などに生ずる三四寸の草で、風蘭に似て、葉裏に茶褐色の點々が並んでゐるので、俗に八つ目蘭といふものと二種ある、こゝのは何とも定めかねる。

御廟は延元以來三百餘星霜を経て、柵のありには葱がひし／＼と生えてゐる。それらの葱草はありし

昔の何をかしのぶたよりとすらん、と非常の草をも猶有情のものと見做して心の内に問ふたのである。

伊勢の守武が云ける、義朝殿に似たる秋風とは何れの處か似たりけむ。我もまた

義朝の心に似たりあきのかせ

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第十七目。大和、山城、近江から美濃路に入る間は一句もなく、美濃の今須在山村の常盤の墓でこの句が出来たのである。守武云々は、「守武千句」に「月見てや常盤の里へ歸るらむ」とあるに「義朝殿に似たる秋風」といふ附句のあるのをいふ。それは何處が似てゐるといふのか知れないが、と云つてゐるが、芭蕉は守武の短句の意を、秋風肅殺萬木を枯し去らんとするのと、義朝が父賴義をそこなひ少弟たちを殺した行爲とを相似たりとしたものと見たのである。

それで芭蕉は、守武の短句を換骨奪胎して、秋の風の人をして物を思はしむるこの寂寥さは、義朝が父を弟を殺したとの自責悔恨のそのさびしき心に似たりと觀たのである。

不破

秋風や藪もはたけもふはの關

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第十八目。「不破」は三關の一として有名だが、平安朝以後はたゞ其趾をとどむるばかりで、「人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後はたゞ秋のかぜ、良經」などゝの如く歌には多く荒廢の状がよまれてゐる。秋風衣袂を吹くこのあたりは、現在見るかぎり藪や畠になつてゐるところも、往昔はすべて不破の關であつたらう、と懷古の情をのべたのである。

大垣に泊りける夜は木因が家を主とす。むさし野を出る時、野ざらしを心に思ひて旅立ければ。

死にもせぬたび寐の果よ秋の暮
死よしなぬ浮身の果は秋の暮

(由子吟行)
(後の旅)

「甲子吟行」中の第十九句。木因は通稱谷九兵衛、船問屋を業とし、初め北村季吟の門、後に芭蕉に歸す。

江戸を出る時は髑髏を路傍に晒す覺悟であつたが、思ひの外に異つた事もなく大垣まで辿りついたので、この秋の暮、死にもせぬ旅宿の果よ、と詠歎したのである。後の句は誤字か彌りくづしであらう。

たび寐して我句をしれや秋の風

(野晒紀行繪巻)

「甲子吟行」にはないが此行の所作か、若しくは後年の作としてもこゝに置くが適當と思ふ。
人々よ、この秋風落寞たる時にあたつて、旅宿してそして、如何に物のあはれさを感じたかといふ我句のこゝろを知れや、と希つたのである。

如行亭

(如行曰、座頭など來て貧家のつれ／＼を紛らしけ
ればおかしがりて)

琵琶行の夜や三味線の音霰

(後の旅)

大垣の門人近藤如行の家に宿つての吟で、主じ如行が師の旅愁を慰めんと、座頭を招いて、三味線をひかせたのに興じ、主人の厚意を謝したのである。

「琵琶行」は唐の白樂天が江南に左遷中、潯陽江のほとりの船中に琵琶を彈する者あるを聞いて、其船に就て更に一曲をもとめ、其感慨を抒べた有名な長詩で、其中に「潯陽江頭夜送客」又「大弦漕々如急雨」等の句がある。

座頭の彈く三味線の音と、折柄降り出した霰の音とが相和して、何れが三味線か何れが霰かと疑はるゝ、昔白樂天が琵琶を聞いた時一座何れも感泣した中に、特に樂天自身が最も感慨深かつたといふが、今宵この如行亭に三味線の音と霰とに、一種淒涼な氣分を味はふ我は、宛かも白樂天の琵琶行の如き夜やナア、と旅中の佗びた氣分の中に音樂を聞いた感慨をのべたのである。

桑名本當寺にて

冬ばたむちどりよ雪のほとゝぎす

(甲子吟行)

冬牡丹ちどりか雪のほとゝぎす

(笈日記)

「甲子吟行」中の第二十句。「笈日記」には前書が「古益亭」とある。住持が古益と號したのだらう。「本當寺」は「本統寺」が正しい。東本願寺の別院で昔は桑名御坊と稱した。牡丹の咲く頃は時鳥が鳴く、然るに今は冬とて此寺の庭には冬牡丹が咲いてゐる、そして宛かも雪中の時鳥とも思はるゝ千鳥の鳴く音よ、と詠歎したのである。

草の枕に寝倦て、まだほのくらき中に濱の方に出て

あけほのやしら魚白き事一寸

(甲子吟行)

雪薄ししら魚白きこと一寸

(笈日記)

甲子吟行」中の第二十一句。晋風氏の「新編芭蕉一代集」の「甲子吟行」は菊本氏所藏の眞蹟本によりて此項を缺く。「笈日記」に支考は「此五文字はいと口おしことて後には明ぼのと聞え侍りし」といひ、「三冊子」に土芳は「この句はじめ、雪薄しと五文字あるよし、無念の事也といへり」と云つてゐて改作たることが明かである。「雪薄し」がなくなつたので「芭蕉句選」其他には春の部に收められてゐるが、此地方では「冬一寸春二寸」といふさうであるからやはり冬の白魚とするのがよい。まだほの暗い曉方に、薄雪の濱邊で漁夫が漁つた白魚を扱つてゐる、まだ冬なので一寸ばかりの白さである、といふのである。

桑名にあそびてあつたにいたる

あそび來ぬ鈍釣かねて七里迄

(鐵宮物語)

一貞享元年一

一五三

これまた此旅中の吟である。桑名と熱田の間は俗に七里といふ船路で、また「萬葉集」の浦島が子を詠ずる長歌のうちに「水江の浦島が子が、鰹釣り、鯛つりかねて、七日まで家に來ずて、云々」といふのがある、それから七日を七里、鯛釣と河豚釣とを連想し、難きの「かねて」を「兼ねて」と換骨奪胎しての作である。

河豚釣をしながら桑名から熱田まで七里までも遊び来ぬ、といふのである。

熱田に移る

鈍釣らん李陵七里の浪の間

(櫻下文集)

此句も前句と同時たることは想像し得られる。

たゞ「李陵」は桑名か熱田かの雅名であらうとは思ふが、それに就て何等の智識もないことを恥づる。

旅亭桐葉の主心ざしあさからざりければ、しばらくと
ゞまらむとせしほどに。

此海に草鞋すてん笠しぐれ

(鍼宮物語)

桐葉は通稱林七左衛門、熱田の人、芭蕉門。「むくも佗しき波のから蠅、桐葉」「夙に冬瓜ぶらりと
ふらついて、東藤」以下、即端、如行、工山の表六句がある。

主人桐葉の懇ろなるもてなしに暫く逗ることに決めた。それでこれ迄は旅路に辛酸を嘗めて一蓋の笠に時雨を凌いだが、今は主じの好意にしたがつて此熱田の海に泥草鞋を脱ぎ捨てん、といふのである。

熱田に詣づ、社頭大に破れ、築地はたふれて草むらに
かかる。かしこに繩を張て小社の跡をしるし、こゝに
石を据ゑて其神と名のる。蓬しのぶ心のまゝに生たる
ぞ、なかなかにめでたきよりも心とゞまりける、

しのぶさへ枯て餅かふやどりかな
しのぶさへ枯て餅賣るやどりかな

(甲子子行)
(後の旅)

「甲子吟行」中の第二十二句。「熱田三歌仙」には「神前の茶店にて」とある。熱田神宮は日本武尊外四坐の神と別に草薙の剣とを祀りて、伊勢に次ぐべき大社であるが、此時代には頗る頽破してゐたものと見える。

熱田の宮に詣で、社頭の荒敗したさまを拜し、蓬や葱などの勝手に生えたのを見て、きらびやかに造り磨かれたよりは其方が反て心に深く感銘されると思ひ、やがて門前の茶店にやすらひての吟である。社は破れ加ふるに蓬、葱さへ雑然と冬枯のけしきである、たゞ茶店に立寄つて餅など買ふやどりなるかな、と詠歎したので、「やどり」は宿泊の意ではなく「とどまる」即ち暫時足をとどめるの意である。

名護屋に入道のほど諷吟す

狂句。木がらしの身は竹齋に似たる哉

(冬の日)
(甲子吟行)

木がらしの身は竹齋に似たるかな

(泊船集)
(三冊子)

「甲子吟行」中の第二十三句。「冬の日」卷頭の句で「たそやとばしる笠の山茶花、野水」「有明の主水に酒屋つくらせて、荷舟」重五、杜國、正平と六吟の歌仙がある、また前書が
笠は長途の雨にはころび、紙衣はとまりぐの嵐にもめたり。わびつくしたる佗人我さへ哀れに覺えける。むかし狂歌の才士此國にたどりし事を不圖思ひ出て申侍る。
とあり。「三冊子」に「初めは狂句木がらしのと餘して云へり」とある。後には芭蕉自身「狂句」を取り去つたものと見える。

竹齋は名古屋に住んだ醫師で、檐下に「扁鵲も耆婆も及ばぬ竹齋を知らぬ病家は愚なりけり、天下蔽醫竹齋」と書きつけて置いたとか、或は晩年狂歌をよみ、弊衣破笠、晏如として四方に遊び「秋風にあきはてゝ世の關越せばまた身に寒き木枯の風」など吟じて、遂に名古屋に歿したともいふ、とにかく一種奇行の變物であつた。此句は後の歌の下の句から來てゐる。長途の旅に笠は破れ紙衣はもめ、我すら哀れに思ふほどの我である、それでふと昔此國に在つた竹齋の事を思ひ出した。木枯の吹くがまにく打ち任する身は、かの「また身に寒き木枯の風」と詠んだ古人竹齋に似たるかな、と我姿を我と詠歎したのである。

くさ枕犬もしぐるゝか夜の聲

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第二十四句。前句と同時の吟である。

草枕即ち旅の宿りに、時雨の音の佗びしさに睡りがてなる折しも、戸外に犬の聲がする。さてはあの犬もしぐるゝか、即ち時雨の佗しさに堪へぬのか、と詠歎したものである。

からくと折ふしすごし竹の霜

(句選拾遺)

晋風氏は「新編芭蕉一代集」書翰部に、吉岡梅遊氏所藏、甚兵衛宛、霜月十七日附、書翰
御宿たづね候て御留守不得御意御残多存候。さりながら市兵へ殿御状、則慥に請取申過分に存候。
江戸へ便りに可申遣候。御留守ながらとまり候へと御とめ候へ共、道づれ御ざ候故とまり不申候。
以上。「からからと折ふしすこし竹の霜」「油こほりともし火細き寝覺哉」

によつて。貞享元年としてゐる、それにしたがふ。

夜は更闌けて四邊閑寂として騒音がない、其中に霜置ける竹の折ふしからかと摺あふ音がする、それが凄寥である、といふのである。

油こほりともし火細き寝覺哉

(甚兵衛宛書翰)

前句と同じ書翰があるので同様の理由でこゝに置く。

油は滓でも交つたかのやうに氷り、燈心はばぢばぢとかすかな音を立てゝ段々光りが薄くなつて来る、真夜中過の寂寥なる寝覺めなるかな、と詠歎したのである。

雪見にありきて

市人よ此笠うらふき。
市人にして是うちん笠の雪傘。

(甲子吟行)
(笈日記)

—貞享元年—

一五九

市人。に。い。で。是。う。ら。ん。雪。の。笠。

(芭蕉句選)

「甲子吟行」中の第二十五句。「笈日記」尾張の部には「抱月亭」と前書があり、「酒の戸たゞく鞭の枯枝、抱月」「朝顔に先だつ母衣を引つりて、杜國」の三つ物があり、此第三の附方に就て杜國が賞讃されたことが載つてゐる。

(一)は、市人よ此傘を賣らう、此雪の白燈々とつもれる笠を、と市人に對して云ひかけたものであり、(二)は、市人にしてこの笠の上につもつた雪を賣らう、と我が感慨をのべたものであり、(三)は、同じ事ながら雪のつもつた笠を賣らうとの感慨である。「市人よ」「市人に」、「雪の傘」「笠の雪」「雪の笠」では各大分感受を異にするが、何れにしても利を専らとする市人に雪の笠を賣らうといふのは、一場の戯謔でもあり、また同時に淡い皮肉を感じる。

たび人を見る

馬をさへながむる雪のあしたかな

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第二十六句。「笈日記」雲水追善の部、悼芭蕉翁、尾州熱田連中といふ條に
(前略)はじめて此蓬萊宮におはして、「此海に草鞋を捨ん笠時雨」と心をとどめ、景清が屋敷もち
かき桐葉子がもとに、頭陀をおろし給ふより、此道のひじりとはたのみつれ。木枯の格子あけては
「馬をさへ詠る雪」といひ、やみに舟をうかべて浪の音をなぐさむれば、「海暮て鴨の聲ほのかに
白し」とのべ、云々

といふ文があるので、此句が林桐葉亭に滯在中の吟であることが知られる。又「幽蘭集」に「木の葉
に炭を吹おこす鉢、閑水」「はた／＼と機織る晉の名乗來て、東藤」「年によるほど伯母の世話しき、
桐葉」と四句ある。

「さへ」は正しくは或物に更に添加するの義、即ち加ふるにの意である。然るに「獸すらも恩を知る」といふべきを俗には「獸さへ恩を知る」といふ如く誤て「すら」に混用されてゐる。爲めに此句も、馬は詠めもないものだが今日の雪にそれさへ(すら)眺める、と誤り解されがちである。併し前書に「旅人を見る」とある、雪中を行く旅人を一の眺めとするのみならず、加ふるに馬をさへ眺る雪の朝

なるかな、と霏々と降りしきる雪の中を行く旅人に馬を添加して眺むる意に詠歎したのである。

海邊に日くらして

海くれて鴨の聲ほのかにしろし

(甲子吟行)

「甲子吟行」中の第二十七句。「鍼管物語」には前書が尾張の國あつたにまかりける比、人／＼師走の海みんとて、船さしけるに、とあつて「串に鯨をあぶる盃、桐葉」「二百年吾此山に斧取て、東藤」櫻の種まく秋は來にけり、工山」と四吟の歌仙がある。

熱田の海に舟を泛べて見てあるに、夕陽はやがて全く西に落ちて、海の面は暮色漸く濃く、たゞ遙かに鴨の鳴く音が聞える、そしてそれが四邊を包むところの闇の中に白く感ぜられる、といふので、なまじの解釋よりは眼を閉ぢて念頭に其境致を描いてみると此句の妙味がわかる。或は聲を白いといふのを非とする人があるかも知れないが、其人には黃色の聲といふことを肯定せぬかと云ふだけで足る。

又此句の「ほのかに白し」を中にして五七五調にすべしといふ人もあるが、それでは「海暮れて仄かに白し」か「仄かに白し鴨の聲」かを読み誤る惧れがある。

杜國亭にて中あしき人の事つくろひて

雪と雪今宵師走の名月か

(笈日記)

「芭蕉翁發句集」には貞享元年とし、「芭蕉句選年考」には貞享四年の吟ならんと云ひ、晋風氏の「新編芭蕉一代集」には貞享四年としてゐる。貞享四年伊良古崎に杜國を訪ふたのは十一月中旬で、十二月は「師走十日餘り名古屋を出て舊里に入らんとす」とあり、又其頃杜國が名古屋には來り得ない事情にある、さすれば此句は貞亭元年名古屋の杜國の宅に於て見るべきものであらう。中たがひしても話し合へば心の雪と雪とが解ける、しかも今宵は丁度師走のまん圓い名月か、と詠歎したのである。

爰に草鞋をとき、かしこに杖をすてゝ、旅宿ながら
に年の暮ければ

としくれぬ笠きて草鞋はきながら

甲子吟行

「甲子吟行」中の第二十八句。

貞享二年、乙丑、（四十二歳）

「一年暮ね笠着て草鞋はきながら」といひくも山家に年を越て

誰 誰 誰
が が が
智 智 智
ぞ ぞ ぞ
歯。 餅。 歯。
朶。 に。 朶。
に。 歯。 に。
餅 朶。 餅。
む 負 む
ふ ふ ふ
年。 丑。 牛。
の。 の。 の。
暮。 年。 年。

(芭蕉句選) (甲子吟行)
(一幅半)

「甲子吟行」二年即ち乙丑の年の第一句。「芭翁全傳」貞享二年の部に「其春の吟、伊賀にて」とあり、また、「三冊子」に「丑の日のとしの歳旦也」とある、即ち丑歳の丑の日の元日に伊賀での作である。

自分の郷里でも、お正月には蟬が男への年禮に必ず鏡餅を持つて行く慣習がある。それを丑歳丑の元日といふことから連想したのである。

この五年の元日に、齒朶に餅を負ふて行くのは何方の智なるぞ、と軽く疑つたのである。「餅に齒朶負ふ」は誤りであらう、また「年の暮」では歳暮禮になり齒朶が利かなくなる、これも誤りであらう。

子日しに都へゆかん友もがな

(芭翁全傳)

「芭翁全傳」に前句を並んである、伊賀での作である。正月初子の日に京都では公卿殿原が郊外へ出て小松をひき、其根の長きを壽ぎ祝ふ、これを「小松引」と云ひ、又單に「子の日」ともいふ。伊賀の郷里に春を迎へた芭翁はもうそろそろ旅心に誘はれて、大内山の春をしのぶ小松引の行事などを思ひ出し、都へ伴ひ行かん雅びの友もがな、と友のあらんことを心のうちに希つたので、「かな」ではなく「もがな」である。

伊賀にて

旅がらす古巣はむめに成にけり

(鳥の道)

「芭翁全傳」には前の句に續いて「ある人のもとに屏風の畫を見て」と前書して此句がある。「旅鴉」は旅中に日を過す自己の事、「古巣」は故郷といふべきものを鴉からの連想に由る。

旅から旅とさすらひ歩く我が、今たま／＼舊里に歸つたら、そこは丁度梅の世界になつてゐた、と感慨に打たれたのである。

奈良に出るみちの程

春なれや名もなき山の朝がすみ (菊本本甲子吟行)

春なれや名もなき山の薄霞 (流布本甲子吟行)

「甲子吟行」二年の第二句。「芭翁全傳」によれば二月中旬に郷里を出發した。

單に濃淡を表す薄霞よりは、時間を闇明にせしめる「朝霞」の方がよい。何がし山と名を負ふほどもない山々も朝の霞が罩め渡つて、今こそ全く春なれやと、春色の濃かるを詠歎したのである。

二月堂に籠りて

水とりや水の僧の沓のふと

(甲子吟行)

（貞享二年）

一六七

水。取。や。こ。も。り。の。僧。の。沓。の。音。
 水。鳥。や。氷。の。僧。の。沓。の。音。
 (繪詞傳)
 (芭蕉句選)

「甲子吟行」二年の第三句。

奈良東大寺二月堂で毎年二月朔日から十四日迄種々の佛事を修し、其廿一日に行ふのを「水取」といふ。それは二月堂の側の若狭井の邊で讀經修法の後、井に對つて若狭々々と呼ぶと井水忽ち逆り涌き、同時に若狭神社の前鷺瀬淵の水が流を絶つて音がなくなる、其井水を汲んで墨をすりて御符を書き、其御符を水に照して其水を飲めば疫病をはらふと云ひ傳へられてゐる。(三)の「水鳥」は誤りなることは明かだが、(一)(二)の「氷」と「こもり」が屢問題になる、然るに晋風氏の「新編芭蕉一代集」所収の菊本氏藏芭蕉直蹟本には明かに「氷」となつてゐる、隨つて「こもり」も誤と見なければならぬ。二月堂に籠つて水取の行事を拜觀する。讀經も濟んで、やがて若狭井のほとりの氷の上に僧の沓の音が聞える、といふのである。

京にのぼりて三井秋風が鳴瀧の山家をとふ、梅林

梅しろしきのふや鶴をぬすまれし

(甲子吟行)

「甲子吟行」二年第四句。三井秋風は名は時次といひ、梅盛門、三井家の一族。この句に秋風の「杉菜に身磨る牛二つ馬一つ」といふ脇句がある。「去來抄」に

秋風は洛陽の富豪に生れて、市中を去り山家に居して、詩歌を楽しみ騒人を愛すと聞て彼に迎へられ、實に彼を風騒の逸人と思ひたまへる文作なりしが、如何ありけん其後招けども行き玉はず、云々とある。秋風は文雅を愛しても一富豪で、とても閑寂を生命とする我が芭蕉とは、意氣の投合を見出しえるはずがない、だから初めは欣んで訪ね、後は再び招ぎに應じなかつたのである。

「林和靖」は洛陽の孤山に住し、梅を植ゑ、鶴を畜ひ、自ら梅を妻とし鶴を子とすと云つた人である。秋風が鳴瀧の山莊を訪ふに、折しも梅は盛開で、宛も林和靖が孤山の廬ともいふべき風情である、しかしこゝにはかの和靖の子とも愛したといふ鶴が見えない、さては昨日あたりにや鶴を盜まれしナラン、想像して主人秋風の高韻を林和靖に擬したのである。

〔貞享二年〕

かしの木の花にかまはぬ姿かな

(甲子吟行)

「甲子吟」二年の第五句。これも前句と同じく秋風の山莊を訪ねての吟で、秋風の「家する土をはこぶつばくら」の脇句がある。樅の木の卓然たる姿が、櫻や其他の花の妍を競ひ艶を争ふが如きものは相關せずといふやうに見える、と秋風を樅に、世俗一般を他の諸花に譬諭して、主の風格を賞したのである。

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ

(蟋蟀の巻)

晉風氏の「新編芭蕉一代集」に貞享二年説とある、此時候に京都に在つた事と、次の書簡とによる推定であらう、それに従ふ。

「蟋蟀の巻」に松風宛の

寛に／＼此世の極樂といふ外にあらず御所のことになん、此四五日以前上京候て御所の中を通りければ、おりふし雨ふりて心靜にいとありがたく、殿々の紅梅今をさかりと見へ申候、音楽さて／＼面白くそぞろに涙を流して通り侍りければ「紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ」いかゞ有べくや、其許は毎日御所方へ御出入被成候人に御座候へば申はくだながら如斯候（下略）

といふ書簡がある。松風とは何人か不明。

御所のほとりを過ぎるとこゝかしこの御殿／＼のあたりに、しと／＼ふる雨にぬれた紅梅が今を盛りと咲きみちて居り、折から管絃の音が優にも洩れ聞ゆる、かの御殿の玉簾の内には、いかに薦たき女房たちのおはすかと、見ぬ戀を心のうちにつくる、といふのである。

伏見西岸寺任口上人に逢て

我きぬにふしみの桃の雫せよ

(甲子吟行)

「甲子吟行」二年の第六句。任口は西岸寺第三世、寶譽上人、如羊と號す。

（貞享二年）

一七一

我が旅衣に伏見の名物の桃の花の零のかゝれかし、と希つたので、上人の高風を桃花の零に擬して、即ち上人の餘香に浴したいとの意である。

大津に出る道やまちを越て

山。路。來。て。何。や。ら。ゆ。か。し。す。み。れ。く。さ。
(甲子吟行)

何。と。は。な。し。に。何。や。ら。床。し。す。み。れ。草。
(鐵宮物語)

「甲子吟行」二年の第七句。「鵠尾冠」に「二度草堂を出で尾陽に来る時に箱根にて」とあり、また「類柑子」に「箱根にて」とあるが、「甲子吟行」に明記されてゐるから誤なることは云ふまでもない。「三冊子」に

初は、何となく何やらゆかし、と有

とある。「歌田三歌仙」には「何とはなしに何やらゆかし董草」「編笠敷きて蛙聽居る、叩端」「田螺わる賤の童のあたゝかに、桐葉」の三歌歌仙があり、それには「貞享乙丑三月廿七日」と日附があ

る、然るに五月十二日附の千那宛の書狀に

(前略) 愚句其元にての句「辛崎の松は花より臘にて」と御覺可被下候「山路來て何やらゆかしす
みれ草」其外五三句も候へども重而書附可申候、云々

といふのがある、それで此句は大津で三月廿日頃に詠んで、熱田で舊作のまゝの歌仙が廿七日に終り五月十二日までの間に改めた經路が明にされる。

「去來抄」に

湖春曰、董は山によまず、芭蕉俳諧に巧なりといへども歌學なきの過なり、去來曰山路にすみれを詠たる證歌多し湖春は地下の歌道者なり、いかで斯は難じられけんいとおぼつかなし。

と云つてゐる、湖春は愚にもつかぬ批難をしたものかな。

ひとりたゞ一と大津へと志して行くと、峠路の路傍に董の可憐な紫の花を見出でよ、何とはなしにたゞゆかしく思つたのである。

湖水の眺望

辛崎の松は花よりおぼろにて。

(甲子吟行)

唐崎の松は花よりおぼろ哉。

(孤松)

「甲子吟行」二年の第八句。古來「にて」留の句として有名で「かな」とあるは誤なることが明かである。此句に千那の「山はさくらを絞る春雨」といふ脇がある、前句に引證した書状によると、千那の許で出来たことは確かであるが、「臍にて」を誤られぬやうに「御覺可被下」と更に申送つたのであらう。其角の「雜談集」に此句を「大津尙白亭にて」とあるのは誤りである。

「去來抄」に此句に就て

伏見の作者「にて」留の難あり。其角曰、「にて」は「哉」にかよふ、此故に「哉留」の發句に「にて留」の第三を嫌ふ、「哉」といへば句返しなれば「にて」とは侍るなり。呂丸曰、「にて留」の事は其角が解あり、又是は第三の句なり、いかに發句とはなしたまふや。去來曰、是は即興偶感

にて發句なる事疑ひなし、第三は句案にわたる、もし句案にわたらば第三等にくだらん、先師重て曰く、其角去來か辯皆理屈なり、我はたゞ花より松の臍にて面白かりしのみなりと。とある、末尾の芭蕉の言葉で此句は明かになる。

湖水を遙かに見渡せば、こゝかしこに花は咲き誇り、辛崎の松もまた其中に見える、そして其花よりはむしろ霞罩めたる松の方が臍にて面白し、とあるべきものの下部の省略である、併し去來も云へる如く、此句は即興偶感として存在し得るので、若し句案ありて此格によらば三等に落つるものである、芭蕉のそれらを理屈なりと云つたのは、理屈を超える芭蕉にして始めてよいので、未だ其角去來の理屈まで到達せずに徒た「にて留」を模倣する者あるを憐む。

晝のやすらひとて茶店に腰をかけて

つゝじ活て其かげに干鱈さく女

(甲子吟行)

「甲子吟行」二年の第九句。晋風氏の「新編芭蕉一代集」所收の菊本氏藏本には此項なし。

晝食に立寄つた茶店につゝじが無造作に活けてある、其陰に客膳の仕度にと干鱈を割きつゝある女が見えた、矚目のもゝを、やがて我が前に据ゑられた膳の上の干鱈を囁みつゝ詠んだのでがなあらう。

吟 行

菜 畑 に 花 見 が ほ な る す ゞ め か な

(甲子吟行)

「甲子吟行」二年の第十句。此句も前句と同じく菊本氏本にはない。

菜の花が一面黄金色に咲いてゐる中を、雀どもがちゝと鳴き交はして、あちらへこちらへ飛んでゐる、其様が宛も人間の花見に興するが如くに思はれる、それを詠歎したのである。

みなくちにて廿年をへて故人にあふ

命 ふ た つ の 中 に い き た る 櫻 か な

(甲子吟行)

命 ふ た つ 中 に 活 た る さ く ら か な

(蕉翁全傳)

「甲子吟行」二年の第十句「蕉翁全傳」に

些中庵土芳其頃は蘆馬と號す、此春播磨にありて、歸る頃、翁ははや此國を出られければ跡を慕ひて京に上る、水口の驛に往あひて同じ旅宿の夜すがら語りあかすとて、

として此句がある。土芳は通稱服部半左衛門、名は保英、蓑虫庵、些中庵ともいふ、伊賀の上野の人芭蕉より十一歳下で此時三十一歳。

許六の「俳諧問答」に此句に就て

是「命二ツの」と字あまりなり。予はせを雇にて借用の草稿に、たしかに「の」の字入てあり。「の」の字入て見れば夜の明たるが如し。知らざる時は是非なし云々

とある、「蕉翁全傳」の「命二つ」は竹人の誤記たることが知られる。また菊本氏藏真蹟本には「いきたる」と明かに假名である。蘆馬といふ號で己でに俳諧に親しんでゐながらも、我郷出身の先輩芭蕉とは二十年相見なかつた。偶芭蕉が歸國した時は蘆馬は旅行中であつた。家に還つて芭蕉のすでに

東に赴いた事を聞き、後を慕つて伊賀から京都へ、さらに江州水口まで行つて逢ふことが出来た。追つき得た蘆馬、思はず舊知に逢つた芭蕉、旅宿の一夜二十年來の事共を綿々として語り合つたことであらう。

足下と我と互に無事に年を過ごして、それが今こゝで二十年ぶりで相合ふことが出来た、我々のこの命二つの中に、また今を盛りと咲き誇つて生きたる桜なるかな、と眼前の桜をかり來つて、相互の無事であつたことを欣び詠歎したのである。

野中の日影

蝶のとぶばかり野中の日かげかな

(笈日記)

「芭蕉翁發句集」の貞享二年とするに従ふ。「笈日記」尾張の部に「題二句」として此句と「永き日を」の句とをあけてゐる、即ち讃嘆の句であらう。

春闌なるころ野中を行くと、日もうらゝかに、一物の目にとまるものがなく、たゞ縫に飛ぶ胡蝶が影

をつくるばかりの日影なるかな、といふのである。

鳴海潟眺望

船足も休む時あ
り濱の桃

(船庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には貞享元年説としてある、が二年の晩春初夏のころは鳴海に居たが、元年春は未だ其地には關係をもたぬと思ふ、それで同氏の前著「芭蕉句集定本」の二年説に従ふ。

鳴海海濱の畠に桃が咲いてゐるので、暫く足を停めて其風景を愛でゝゐる。ふと海面を見やると一葉の舟が進みつゝあり、舟中の人もまたこの海濱の桃を賞するのかして、其舟足も暫く休む時がある、といふのである。

伊豆の國蛭が小島の桑門、是も去年の秋より行脚して、
我跡をしたひおはりのくにまで尋來たりけるに、

—貞享二年—

いざ共に穂麥くらはむ草まくら

(甲吟子行)

「甲子吟行」二年の第十一句。「桑門」は僧。

伊豆の僧が行脚の道運にて跡を追つて尾張まで來たので、それではこれから一緒に穂麥を食ひながら旅をつみけようといふので、穂麥は眼前のものであり、又麥飯を思はしめる。

此僧我に告て云、圓覺寺の大巔和尚、ことしむ月のはじめ遷化し給ふよし、まことや夢の心地せらるゝに、まづ道より其角が方へ申つかしける。

梅戀て卯の花拜むなみだかな

(甲子吟行)

「甲子吟行」二年の第十二句。大巔和尚は鎌倉圓覺寺第百六十三世、名は梵千、字は大巔、千長老といひ、併に幻呼と稱し、「虛栗」卷頭の句主であり、また其角が修禪の師である、貞享二年正月三日

に歿したことを前にある行脚の僧に聞いて、其角へ云ひ送つたのである。其手紙は

草枕月をかさねて露命恙もなく、今ほど歸庵に趣き、尾陽熱田に足を休むる間、ある人我に告て圓覺寺大巔和尚ことし睦月のはじめ、月まだほのくらきほど梅のにほひに和して遷化したまふよし、こまやかにきこえ侍る、旅といひ無常といひかなしさいふかぎりなく、折節のたよりにまかせ先一翰投机右而已「梅戀て卯の花拜むなみだかな」四月五日

とある。「芭蕉句選」に「櫻戀ひて」とあるは誤である。

大巔和尚が正月初に遷化したことを聞き、梅花の咲くころでもあり、また和尚の「虛栗」卷頭の「禮者敵門齒朶暗く花明なり」(花は梅花也)を憶ひ、其高潔なる人格を憶ひ、いつも白梅に想を集めしむるものがある、そして其事實を耳にしたのは卯の花の咲く頃であるから、其白梅の佛を慕うて今それに似て白き卯の花を拜みてそゝぐ泪なるかな、と詠歎したのである。其角の和尚を悼んだ句も「三日月の命あやなし闇の梅」といふのである。

杜國におくる

—貞享二年—

白けしに羽もぐてふの形見哉

(甲子吟行)

「甲子吟行」二年の第十三句。杜國は名古屋の米商で坪井庄兵衛と云ひ、「尾張五歌仙」の作者の一人である、後に罪を得て追放され、三河伊良子に住し、元祿三年五月五日（或は廿六日とも）歿したとされてゐる。ところが「高潮」十六卷六月號に、贊川他石氏は「杜國のさまゝ」と題しての考證を掲げられた、今其要點を左に抜粋する。

杜國の通稱を飾屋平兵衛とし、または名主勤務中下げ金をつかひこんだといふ説は誤である。氏名は坪井庄兵衛と坪井惣兵衛と二説あるが何れが是か決定されぬ。罪案は「過本紙」といふので、米の先物賣に對しての整理不能である。追放後は尾張領でない三河の畠村（現在の愛知縣渥美郡福井町）に住んだ。同所の潮音原といふ所に墓があり、それには「恒産醫業」とあり、また「杜國、南彥右衛門、元祿三年庚午二月二十日歿」と彫つてある。歿年齢は不明。

といふのである。貞享元年の冬はまだ尾張に居つて五歌仙の席に連つた杜國が、同四年冬には已に三河伊良子に住んでゐた、さうすれば罪にとはれたのは二年或は三年であるが、此句は未だそんな問題

の起らぬ時か、或は問題になつてからか、それが解ると句解に都合がよいが、先づ暫く普通の留別と見て置く。

白けしの淡きを杜國に擬し、己を蝶に比し、白けしのお前に羽をもいで残すのは、今江戸に歸り去らんとする蝶の私がかたみとするものなるかな、と詠歎したのである。

二たび桐葉子が許にありて、今や吾妻に下らんとするに

牡丹しへ深くわけ出る蜂の名殘哉

（甲子吟行）
(笈日記)

牡丹しへを分けて這出る蜂の名殘哉

（鐵笛物語）

牡丹薬分て這出る蜂の名殘かな別れ哉

（ゆめのあこ）

「甲子吟行」二年の第十四句。元年の冬にも林桐葉亭に滯在したのでこれが二度めになる。「夢の跡」

—貞享二年—

に「牡丹しへ深く這出る蜂の別れ哉」「朝月涼し露の玉鉢、桐葉」「歌袋望なき身に打かけて、叩端」以下無記名の歌仙が一巻ある。

牡丹は即ち主桐葉、蜂は即ち自己、其牡丹が薬を深く包蔵してくれてゐたが、今や別け出て江戸へ歸らんとする蜂の名残なるかな、と留別の意をのべたのである。

盤齋うしろ向の繪姿に

團もてあふがん人のうしろむき。
(桃舐)
團扇とつてあふがん人の後むき。
(三冊子)
團もつてあふがん人の背口つき。
(笈日記)

「笈日記」尾張の部にある。「芭蕉翁發句集」には貞享元年とし、晉風氏の「新編芭蕉一代集」には二年説をとつてゐる。それに従ふ。又「芭蕉翁發句集」には前書が、

盤齋のうしろむきたる像「世の中をうしろになして山里にそむきはてゝもすみ染の袖」と云ふに。

とあつて、「取つて」の方である。又「三冊子」に

此句、集ども、「うちわもて」と五文字して下の五文字「後むき」「せなかつき」と有。後改るか。とある。盤齋は貞徳門の歌人で、姓は加藤と云つた。盤齋の歌には自分も同感である、故に團扇もて其人のうしろ向きの姿を扇がん、といふのである。

杜若われに發句のおもひあり
(千鳥掛)

晋風氏の「芭蕉句集定本」「大系本芭蕉一代集」「新編芭蕉一代集」何れも貞享二年としてあり、「新編芭蕉一代集」連句編には「麥穗浪よるうるほひの末、知足」「二つして笠する烏夕ぐれて、桐葉」以下、叩端、美言、自笑、如笑、安信、重辰、の歌仙未滿二十四句のものをあげて、元祿元年としてある。發句は貞享二年で連句が元祿元年の意であるか、とにかく今年の部に置く。

鳴海の知足亭の庭前で杜若を見ての吟である。知足は通稱下郷勘兵衛。名は吉親、蝸廬亭、照軒等の別號があり、剃髪して寂照と云つた、鳴海の酒造業者で商號を千代倉といふ。

杜若には伊勢物語に杜若を冠五に置いた「唐衣きつゝなれにしつましあればはるゝ來ぬる旅をしそ思ふ、業平」といふ旅中の歌がある、今我も旅中この杜若に對して歌ならで發句をよまんとする思ひがあるといふのである。

思ひ出す木曾や四月の櫻狩

(敏宮物語)

思ひ立つ木曾や四月の櫻狩

(幽蘭集)

「敏宮物語」に、貞享二年尾張熱田にて「翁これより木曾路に赴、深川にかへり給ふとて」とあり。「幽蘭集」に「京の杖つく姐の夏麥。東藤」「牛の子の乳をのむ日かけ閑にて桂樹」以下、叩端、桐葉、工山、閑水、の表十二句がある。

「思ひ出す」といへば嘗て有つた事を追憶するの意である。即芭蕉は天和三年の初夏の頃甲州に旅寐して居り、其頃柏水といふ者に宛てた書翰中に、木曾路に遊んだことのあるのが見える(馬ほく／＼の句下参照)。即ち其時の木曾の四月の櫻を思ひ出したのである。

尾張あたりではもう早くも花は散つてしまつた、其四月の櫻狩をせんと、ふと思ひ出して志す木曾路やナア、と詠歎したのである。

甲斐の山家に立よりて

ゆく駒の麥になぐさむやどりかな

(甲子吟行)

「甲子吟行」二年の第十五句。

馬を雇てほく／＼と山路を行く、やがて山中の茶店につき、芭蕉も馬夫も濃茶に喉を潤し、其間に馬夫があたりの畑から青麥をちぎつて来て馬に食はせる、そこで駒が麥に慰むやどりなるかな、と詠歎したのである。「やどり」は宿泊の意ではなく、雨やどりの「やどり」と同じく立寄つて休らるの意である。

甲斐山中

山賊のあとがい閉るむぐら哉

(續虚栗)

（貞享二年）

一八七

貞享四年の「續虛栗」にある。芭蕉の貞享四年前に甲州に足跡を印したのは天和三年と貞享二年であるが、天和三年の夏の跋文ある「虛栗」になく、貞享四年の「續虛栗」にあることから、貞享二年と見てよからう。「頤閉る」は口を開かぬことで、山賊があきれてものも言はぬほどに茂れる葎なるかな、と葎の密生を詠歎したのである。

卯月の末庵にかへりて旅の疲れをはらす程に

夏衣いまだ虱をとりつさず

(甲子吟行)

「甲子吟行」二年の最終の句。貞享元年八月、よしや路傍に白骨をさらすとともにの大決心をもつて江戸を出發し、九ヶ月の旅宿も無事に、四月末に深川の庵に歸りついての作である。

旅から歸つて、勿々として、未だ夏衣の虱もとり盡さず、と旅こゝろの脱けきらぬ氣分を云つたのである。

雲折く人をやすむる月見哉 (春の日)

貞享三年八月出版の「春の日」にあるので、二年の作と見る、晉風氏の「新編芭蕉一代集」に十七日附意水宛の書翰に

西行のなかくにときく雲のかゝるといふ心を持って「雲折々人を休むる月見かな」右の句にて今年の名月はすまし申候、(下略)

とある、「なかく」は山家集「なかくに疊ると見えて晴るゝ夜の月のひかりは添ふこゝちする、西行」をさしたのである。西行の歌の意は、満天一片の雲のないよりは、疊るかと見えて晴るゝ方が月は反てよい、といふので、其心をとつて、雲が折々に出て来ては人を休めしむる今宵の月見なるかな、と其夜の風情を詠歎したのである。

菊花の蝶

秋をへて蝶もなめるや菊の露。

(笈日記)

—貞享二年—

一八九